

福岡市

板付遺跡 調査報告



福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集



1970 福岡市教育委員会

発刊のことば

板付遺跡は、日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会、同農業史部会、九州大学考古学関係各位により昭和26年から2次にわたる調査で、縄文晩期から弥生初期への過渡期を示す土器類、炭化米などの遺物、竪穴貯蔵庫、周溝などの遺構の発見に基づいて弥生初頭期わが国最古の代表的農耕集落跡として埋蔵文化財究明のうえで、重要な位置を占める遺跡であることが確認されました。

近来、当該遺跡周辺一帯に住宅が建ちこみ、現状変更を余儀なくされており、また環濠住居址推定地の通津寺が、本堂裏に納骨堂の建設を計画しているため、遺跡の全容が十分把握されていない現在、その保存対策上絶続的な緊急調査を行なう必要があるとの見地から、今般、国・県の補助を受け、委員長阿部福岡市長、副委員長鏡山九州大学教授、同石井市教育委員長、九州大学文学部考古学研究室、板付遺跡保存会代表各位を委員とする板付遺跡調査委員会において緊急調査を実施するにいたりましたところ、予想以上の成果をあげることができました。

このことは、ひとえに関係各位の文化財に対する深いご理解とご協力に負うところが大きい証左といえましょう。

この調査が古代の郷土文化史研究の一資料として、各分野で大いに活用いただければ幸いです。

なお、本書の発刊にあたり調査および原稿の執筆を担当された九州大学文学部考古学研究室、九州大学第2解剖学教室、西田京子氏ならびに板付遺跡保存会のご協力に対しまして深甚の謝意を表します。

昭和45年3月25日



福岡市教育委員会
教育長 豊島延治

目 次

I 調査にいたる経過	2	IV 遺物各説	12
II 調査の概要	3	上 器	12
III 遺構各説	5	石 器	16
環状溝	5	土製品と滑石製品	22
竪穴住居址	7	V 板付遺跡出土の動物骨	22
袋状竪穴	7	VI 弥生時代遺物包含層の花粉分析	22
非戸址	9	雅おわりに	30
その他の遺構	10	図 版	31

本稿の執筆はI～IV、雅は下條、Vは永井、VIは西川があたり、製図、写真、編集は下條が担当した。



第1図 今日までの板付遺跡発掘調査全図

1～4区は昭和26～29年の日本考古学協会調査地域

5～9区は昭和43年の日本考古学協会調査地域

10区および黒線枠内は本年度調査地域

本図は明治大学の原図に本年度の調査結果を加えたものである。

井は井戸址をあらわす。



西よりみた板付台地の景観

I 調査にいたる経過

宝満山に源を発した御笠川が福岡平野の東側山麓に沿うて西北流し、やがて激しく蛇行しながら福岡平野の東側中央部に切り込むように河道を変遷するところで国道三号線と交錯する。この地点より南に0.5km、ちょうど板付飛行場の西南1kmあたりに長さ南北500m、幅北部で100m、南部で150mの、東南、西北に走る、標高11~2m板付洪積層台地が微高地をなして島状に沖積平野の中に浮かんでいる。今次の調査地点はこの微高地の北部で、11mの等高線が円形に走るその内部の通津寺（福岡市板付2丁目12の61）の境内である。この付近に遺跡の存在が知られたのは古く江戸時代にさかのぼり、慶応3年1月5日銅矛5本が表土下3尺位のところから出土したことが同寺所蔵の過去帳に報じられている。ついで、大正5年8月同寺のすぐ南の板付田端より、水田化のための地下掘が行われた際、地下4、5尺のところより腰帯に副葬された鉄劍3本、銅矛3本の合計6本の古式の彫形銅器が出土し、翌6年中山平次郎氏によって紹介された。

しかしいずれの発見も時代の制約と全くの偶然の出土であったがため、弥生時代の墳墓があつたということ以上に知ることができなく、本格的にしかも全面的に板付遺跡にメスが入れられたのは戦後のことであった。

日本考古学協会弥生式土器文化研究特別委員会の森貞次郎、岡崎敬、杉原莊介氏等によって板付遺跡の調査が最初に行われたのは、戦後復興もようやく軌道に乗り始めた昭和26年のことで、同29年まで4カ年にわたり第4次にいたる継続調査が行なわれた。その時主に調査された地点は通津寺境内西側の一帯低い台地で、その箇所より板付遺跡の集落の中心部をなすと考えられる境内をとりまくようにめぐらしているV字状の環溝（弧状溝）の一部、これに対する弦状溝、29個の袋状堅穴、6個の井戸や種々の弥生時代の遺物が発見調査されている。その経緯と内容についてはすでに完好的な報告書が出版されているので摘要するにしても、日本における稻作農耕の開始期と系譜、北九州の土器編年、農耕村落の実態の完明確立に多大の成果を上げた。次いで昭和43年8月日本考古学協会農業史部会の杉原莊介氏によって戦後第二回の調査が行なわれた。第一回の調査の際、すでに予知されておりながら、発掘することのできなかった環溝の追跡調査が実施された。その調査によって第一回調査時の弧状溝が境内の北側一段低い部分を通って境内東に走り、東側中央付近で一段高い境内内を走っていることが確認され、西側では弧状溝の延長は南に走っていることが同時に調査確認された。環溝のほぼ60%を発掘によって明らかにすることができた。それによって復元すれば、環溝は椭円形をなし、南北で約90m、東西で約80mを測ることが知られた。

その後同年9月にいたって、板付町内会長および、同寺住職より、境内内の墓地改葬と納骨堂

建設の予定があるため、埋蔵文化財発掘届が提出された。境内西半分にあたる墓地改葬地は今日までに墓地造成の際に擾乱をうけており、その北側の旧墓地は戦後最初の発掘の際にもトレンチが設けられたがほとんど遺跡の残存が望めない状態であったことが確認されている。今日までの調査の経過と内容からみて、環溝内、集落中心部分の調査が行なわれておらず、集落址が残存しているとするならば、境内東半分の北側、庫裡の廻廊部分としか考えられずその地点がちょうど、納骨堂建設予定地であったため、関係諸官署と協議の上、団および県の補助を受けて、昭和44年7月25日から8月12日までの19日間、福岡市教育委員会の主催のもとに庫裡背後地域の調査を行なうことになった。

従って、調査は、環溝内の集落址、特に住居址および、それに附属する諸造構の検出に全力を注ぐことになった。

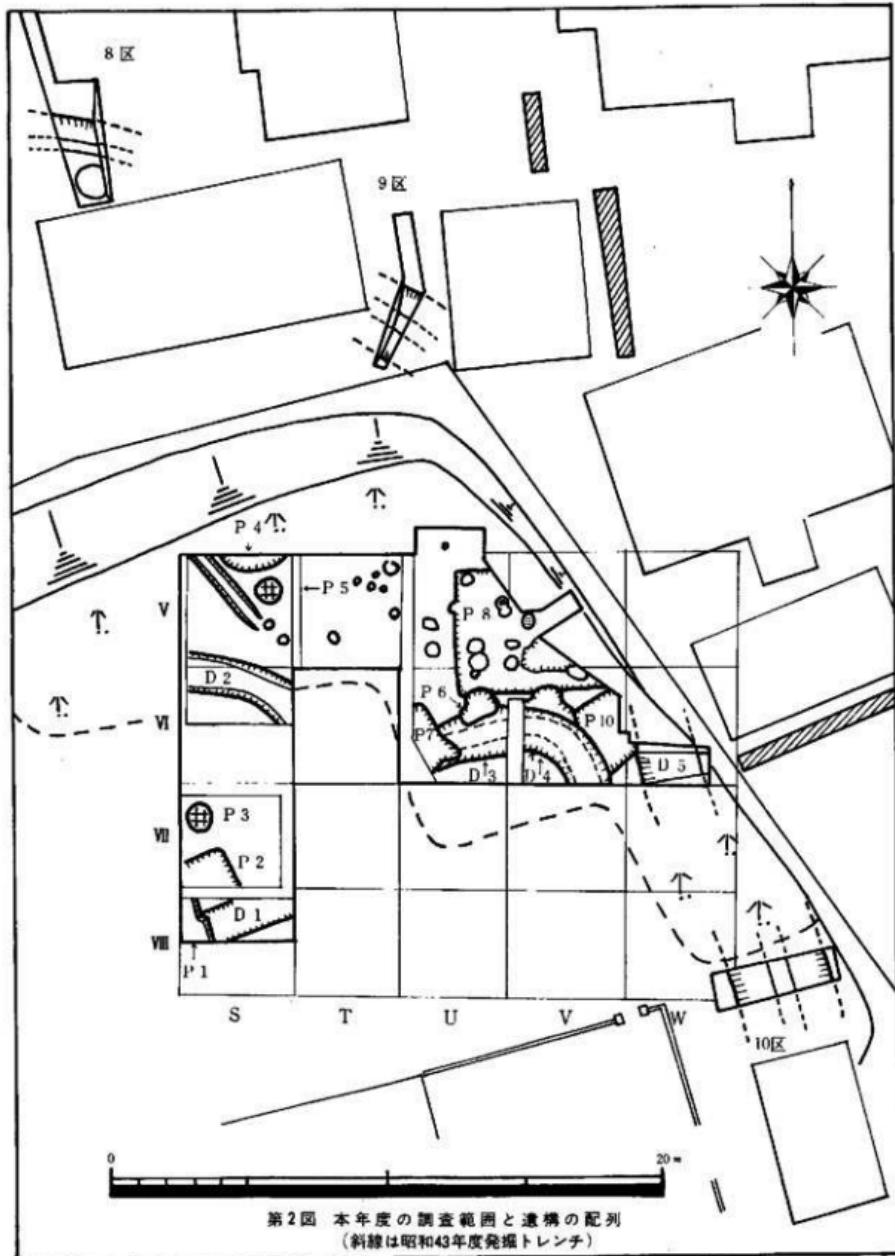
そのために板付遺跡調査委員会を設け、阿部源藏福岡市長を委員長とし、鏡山猛九州大学教授を副長とし、九州大学教官諸氏、地元保存会などの指導、援助のもとに当市職員および九州大学、福岡教育大学、団学院大学、福岡高校の学生有志が調査にあたった。なお、杉原莊介、永松七三、佐藤敏也、乙益重隆、神沢勇一、伊藤玄三、熊野正也、服部学、市川勇氏らによって構成された日本考古学協会農業史部会の調査は昨年にひきつづきV字状の環溝の追跡調査を実施したが、資料使用上の便宜を考慮して合わせてその調査結果を併記させていただいた。

II 調査の概要

11mの等高線によって閉まれる境内は四周に対して一段高い崖をもって隔離しており、この高い部分は全て通津寺および板付町有地となっている。この境内の中央から東よりに東西に通津寺の本堂、庫裡が並び、この建造物を境にして境内全体を、北を裏、南を表と二分できる。そして、およそこの建物をはずれる境内西側一帯は墓地あるいは旧墓地として遺跡の残存を望むことはできない。従って調査は境内裏部分（境内北東地区）が主な対象となった。この地域の大半は花壇、菜園となっているが、北側崖面から東側崖面に沿って幅5m程の一段高い（30~40cm）竹籠（境内全体からいえば北東隅）があり、この地点が遺跡残存地として有望視された。

境内を中心として、今までに調査された全ての地域、環溝走行予定地域を含む範囲を明治大学製作の1/200の地図をもとにして磁北を軸として一辺4mのグリッドを設けた。東西にアルファベット、南北に北からローマ数字を用いてグリッドの標識とした。それによれば、本年度調査地域はS-W、V~VIIIの範囲に含まれるものである。ほぼ全面にわたって調査を実施することができたが、S-VIの一部、T-VII、VI、U-VII、V-VII等は花壇が造営されていたため発掘することができなかつた。調査面積は総計160m²に及ぶものである。

遺構は調査地域のはば全面にわたって出土し、おむねPit状遺構と溝状遺構に大別できるが、時期は複合的で弥生時代のものから中世にいたるまである。Pit状遺構には種々の性質の遺構があり、合計9個を出土している。第2図には統称してP₁・P₂……と記しているが、その内容は以下のとおりである。P₁（井戸址II・S-VII区）、P₂（井戸址I・S-V区）は弥生時代中期後半～後期初頭の井戸、P₃（V-VI区）は弥生時代の袋状貯蔵穴で、P₄（U-V、VI）は同時代の堅穴住居址である。他のP₅（S-VII区）、P₆（S-VII区）、P₇（S-V区）、P₈（U-VI区）、P₉（U-VI区）は平面方形あるいは円形のPitであるが、その性格、時期は共に明確にしがたい。溝状遺構は合計5個と第10区（X-VIII区）の1個の総計6個が調査され第2図にD₁・D₂……と記したが、D₁（W-VI区）と第10区は日本考古学協会によって調査されたもので、いずれも境内をとりまくV字状の環溝の一部で、弥生時代初頭につくられたものであり、昭和26~29年、同43年に調査された環溝と接続するものである。D₂からは貝塚が検出された。D₃（S-VI区）、D₄（U-VI区）



第2図 本年度の調査範囲と遺構の配列
 (斜線は昭和43年度発掘トレンチ)

D₄ (V-VI区) は形態からみて同質の溝で時期的に下降するものと考えられ、D₃、D₄ は接続する同一の溝である。D₃、D₄ が整がるものであるかどうかは、弥生時代遺構の調査に全力を注いだために時間的余裕がなかったことと中途を花壇等に中断されたために、発掘することができなかつたので、確かな事はいえない。それは D₁ (S-VII区) についてもいえることである。

地表面はほぼ平坦で、竹林部分が相対的に若干高くなっているが、それを剥いた面においての絶対高にはほとんど差はない。

現納骨堂の基礎の西北隅を 0 (仮基準) として、すべての計測の基準としたが、S-V区西北で +30cm、S-VII区で +45cm、V-VI区で +30cm をはかり、比高差は 10~20cm を數え今年度発掘区の西北がわずかに高く、東南方向が低くなるが、ほぼ平地といえる。現今地山高はこれとは全くの逆現象を示し、西北高浅く、東南方向が高く、その差 30~50cm を測る。但し、この地山は削平擾乱はげしく、必ずしも全面的に原初からの差とは断定できない。従って堆積土は、浅いところ (S-V) では 50cm 内外、深いところでは (第 10 区) 140cm にもおよぶ。表土層を除いた地山の層位は地域によって三層 (S-VII) に分離されている所もあるが、ほとんどは区別できない暗褐色の単層で、弥生式土器片を数的には多く出土するが、他に須恵器片、石錐片、近世陶磁器、現代の瓦、土器を含んだ完全なる擾乱層であり、よしんば二層に分離できるところがあつても、各層位間の包藏物の区別は全くなく、最下層まで弥生式土器と近世遺物が同伴しておってこれも擾乱層としかいえない。この傾向は遺構内部にまでおよび環状溝以外の D₁、D₂、D₃、D₄ は床面まで同様の擾乱状況を呈している。弥生時代につくられた諸遺構はその後幾回となく擾乱をうけ、掘り込みの浅い堅穴住居址などは、削平擾乱をうけ喪失し、掘穿の深い井戸址などだけは原初に近い状態で残存する。現存の弥生時代堅穴は地山レベルの高い處にわずか床面のみが残っており、地山の削平度はかなり激しいものであることが判明した。

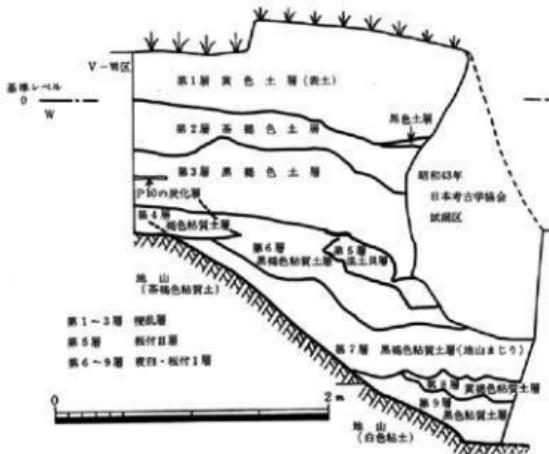
全般的に堆積土中には弥生時代の中期土器の出土量が最も多く、中央より西側部分には弥生時代中期土器の出土が圧倒的で前期土器は少ない。この部分には須恵器の堅穴遺構がかつてあったものらしく、今は擾乱されて遺構を検出することはできないが、掘穿深度の深い井戸址は P₃、P₅ として、今も西側部分に残っている。各遺構について以下詳述する。

III 遺構各説

〔環状溝 I (D₅)〕 (W-VI区 第3図 図版Iの2、図版IIの1)

境内の崖面下を走る環溝が W-V 区あたりで境内に上って走るようになるが、そのすぐ北の W-VII 区に当区はある。昨年度の日本考古学協会による環溝調査の際、当区内に小貯蔵庫が堆積していることを発見されていたので、本年度の調査に加えることになった。W-VII 区の南辺より幅 2m で溝をたちるように発掘区を設定した。調査は土器形式の設定のために、丹念をきして 5~10cm 剥りで行なった。

溝は断面 V 字形をなし、前回までの溝の調査結果と何ら変わるものではなかったが、この地点はちょうど、溝が境内下と境内とにまたがる位置にあったため、V 字状溝の西側 (境内内) は比較的溝の形態の現存は良好であったが、V 字溝の中央を今日の溝が流れている、東側が調査範囲外であるため、V 字溝西側に調査の力点が置かれた。V 字溝東側は一段低くなってしまっており、そのため溝の上部はすでに削平されている。現状では溝高 1.5m、溝幅 (推定復元) 3.5~4m を測るが、溝高は本来的には 2m はあったと考えられる。西側の溝上端はまた P₁₀ の袋状貯蔵穴 (第 4 層) によってカットされている。



第3図 環状溝 (D₅・W-VI区) 断面土層図
D₅・W-VI区 遺物出土状態 (夜臼・板付土器)

はできない。層位と土器の時間的関係は今日までの板付遺跡の調査結果と同じである。出土遺物はかなり豊富で板付II式の層より扁平片刃石斧、石鎌、夜臼、板付I式より石庖丁、打製石鎌、大型船刃石斧、抉入石斧、勾玉等が出土して今調査範囲の中で、最も種々な遺物を出土している。

貝層は破碎された状態の強い混土貝層で、板付II式土器を包含する。貝はヤマトシジミ、カキ、アサリ等が混在し、淡鹹水産両種が知られる。一体に貝層は小さなものらしく、全体の範囲は発掘していないので何ともいえないが、出土のあり方はブロック状の貝殻群がいくつか集合していた状態で、その一単位の大きさも、幅30~50mm、長さは一個では最低30mmぐらいで、厚さは20mm程度の小貝殻群である。縄文以来の伝統をいまだ引き継ぎ残しているものの、すでに断絶が目前にせまっている、痕跡的な弥生時代の貝層といえよう。

この小貝層中および周縁より、動物骨が出土しており、これも詳しくは後述するが(Ⅷ章)イノシシ、シカ、魚骨などが出土し、猪牙利用の用途不明の牙製品も出土している。

〔環状溝 II〕 (10区・X-VIII区 第4図 図版Iの1)

D₅ (W-VI区) のV字状溝の更に8mほど南で、すでに環溝が完全に寺境内に上り込んだ地点に位置し、環溝全体のほぼ最東端にあたる。これも厚さ1.3mの厚い表土に覆われている。溝はほとんど完全に近い姿で残っており、溝幅約3.5m、溝高1.6mを測る。

溝の堆積層は大きく三層に分けることができ、最上層の表土下は褐色粘質土層で、次の



D5 - W-VI区 遺物出土状態 (夜臼・板付土器)

第2層の暗褐色粘質土層は夜臼・板付I式土器を主体として、板付II式土器を混じる土器を出土する。

最下層の第4層は粘土ブロックの混入した土層で夜臼・板付I式土器のみで構成されるが板付I式土器が多量をしめる。この層より土製軋轆車の破片なども出土している。

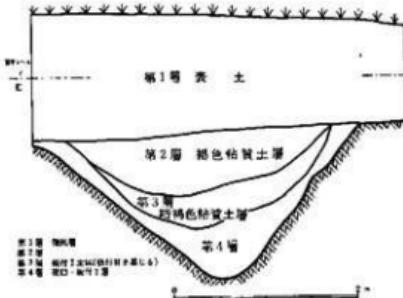
(豊穴住居址(D₄)) (第5図
図版IIの2)

U-V区を中心に一部J-I区にかけて東半分を大きく擾乱された方形豊穴住居址が存在する。この地点は他のグリット、特に南側より、

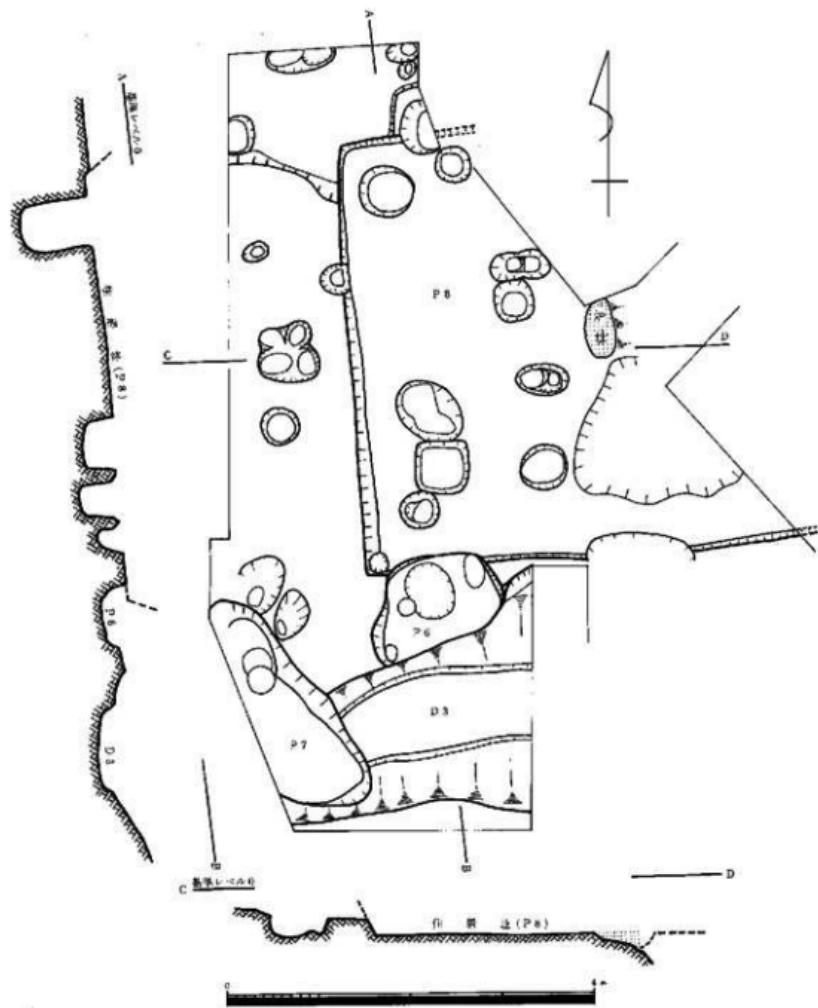
地山レベルが20~30cmほど高いレベルを示している。北辺の一部と東辺は崖面に接し、かつ、はげしく擾乱されているため一部掘り残している部分もあるが、西辺で4.7m、南辺で現長同じく4.7mを測り、南南東側の隅は判っていないが、4.7~5mを一辺とする方形、或いは長方形の住居址といえる。ほぼ南北の方位をとっている。炉址は中央よりやや東よりの地点に位置し、70×30cmの南北に長軸をおく横円形を示しているが、東半分はすでに削りとられ、その地点より東は崖面傾斜に接続している。この炉址の南にも、大きな不定形の全く近世による掘り込み、擾乱が認められる。一般にこの住居址、東側の崖沿いは全体に新しい擾乱、削り込みがいちぢるしく、未摺住居址部分の残存はあまり期待できない。柱穴とおばしきPit群は豊穴内外に多量にあるが、柱穴内出土土器と照らしあわせても、組合せを把握することはできなかった。住居址の削平は激しく、西辺で壁高20cm、坪辺で7cm、南辺で5cmととわざかしか残っていない。表土およその下層の暗褐色土層は弥生式土器を中心にながらも、近世陶器もかなり含む擾乱土層で、住居址埋土内はすべて弥生式土器であり、弥生式代の住居址であるといえるが、夜臼、板付I、板付II、板付III、須玖式と巾広い時期にわたっており、層序的に分類調査を試みたが、各層における構成はいずれも上記の上器を含むものであり、床面土器も基本的に何ら変化をみず、かえって須玖式土器の増加をみる状態である。北九州における方形豊穴住居址の出現は現今のところ、弥生中期中頃を上限とすることと考えあわせると、本遺構は弥生中期の中頃より下ることのない、それ以前を含めた弥生時代の時期に創られたものとすること以上の結論はだせない。

(袋状豊穴 (R₀)) (第6図
図版IVの1、2)

V-VI区の東側部分に位置し、環溝と接する地点にある。豊穴の北東域は崖面に接するため一部掘り残している。主軸は北より34度西にかたよっている。西辺はD₄によって削られているが西北隅は残っている。南辺の西隅もD₄によって削除されている。同辺の東隅はW-VI区の環溝中にのび、環溝を切って本豊穴がつくられたものであることはわかるが、現存W-VI区の環溝西側上端より環溝中に50cm程入ったところを東辺が走り、これにより推し測れば、豊穴底部で、南北2.4m、東西2m程度を測る方形豊穴であったと考えられ、隅はただ一か所残っている西北隅より判断すれば、隅丸状を呈している。中央より南に片よったところに柱穴状のPitが一個検出されている。豊穴の上部はかなり大はばに削平をうけており、下底部を僅かに残すのみで、北辺沿いの壁は相当削られ、西辺では完全に削平され、南辺の一部にわずかに保存良好な壁を残している。



第4図 10区 環状溝断面土層図



第5図 U-V・U-VI・V-VI区の堅穴住居址 (P₈) と U字溝 (D₃)

その地点で壁高70cmを残し、袋状に湾曲している。北辺で40cmの壁高を示す。昭和26-29年度の調査の際に多量の袋状窓穴が出土したが、そのうちPit 2は平面方形で三個の柱穴状Pitを各コーナーに有して、住居址と貯蔵穴の性格判断に疑問を残していた。今回も柱穴状Pitを有して、住居址の可能性も調査期間中に論じられたが、未掘の部分があるとはいえ不規則的位置に僅かに1個の柱穴しかなく、かつ堅穴断面が明らかに袋状をなしているところからその用途は袋状貯蔵穴とし

ておく。表土層および下層の地山ブロックを混じる黒褐色土層、茶褐色砂質土層は石塙、石函丁、石斧を出土した。前一終末期までの弥生時代遺物を主体とするが近世瓦、瓦器、陶器を含む後世の擾乱層である。弥生時代遺物のみを出土する層は竪穴内埋土で、竪穴内埋土は四層に分離して発掘した。

各層に含まれる遺物は夜臼、板付I、II、III、須玖式土器より構成され、各層いずれも同様なあり方を示し、直構削作時の年代決定ができる。袋状貯藏穴は北部九州において、夜臼、板付I式期よりはじまり、前期末から中期初頭にかけて隆盛をむかえ、中期中葉には、ほぼ消滅の方針をたどる。その中でも平面方形の袋状貯藏穴は夜臼、板付I式期に繁栄しその後は円形の袋状貯藏穴に移行すると考えられており、この点より判断すれば本竪穴は古式のものに属する可能性をもつていて、本貯藏穴より扁平片刃石斧、滑石製未製作鍬車を出土している。

〔井戸址〕

S-V区(P_3)およびS-V区(P_4)

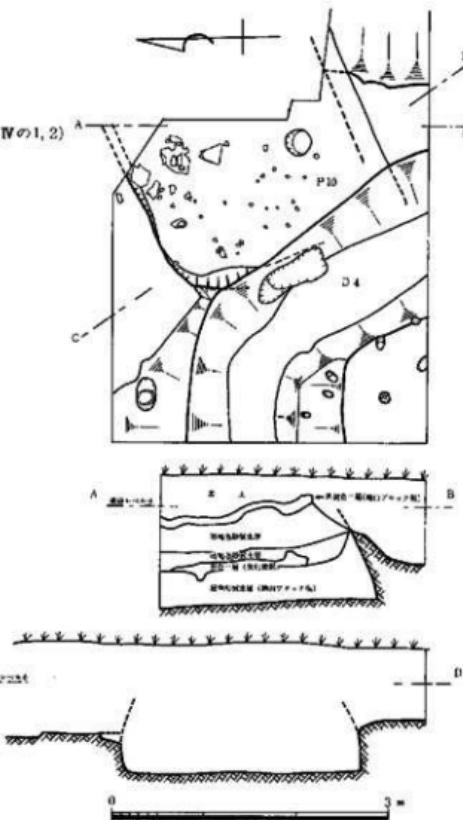
に各々1個の計2個の井戸址が検出されたが P_3 井戸址は完掘したが、 P_4 井戸址は中途で調査を打ち切り埋め戻さざるを得なかった。

井戸址 I (P_3 , S-V区 第7,8図 図版IVの1,2)

S-V区の東北部、表土下より106cmのところに井戸口が発見された。

表土中にも弥生式土器を中心としてかなりの遺物が含まれるが全くの擾乱をうけている。井戸内土層は上部より黒褐色土層、暗褐色土層、黒色粘質土層、青白色粘質土層、黒色土層と続き、その間に地山の白色粘土層が間層として挟まれており、有機質土層中にも拳大の白色粘土ブロックや褐色土塊が混在している。最下層の黒色土層中には有機遺物が多量に含まれている。最上部の白色粘土塊は地山の白色粘土より上部にあって、 $20 \times 30 \times 10$ cm程度の粘土塊を積みあげた状態にあり、しかも現今水位面に位置しているところから、人工的所作の集積とも考えられる。

井戸は口径0.95mを測り、1mほどやや広がりをもっており、その点で急激な肩の張りをみて、口より1.9m下った地点で洞の張りが最も強く径1.6mを測る。それより以下は漸次底すぼまりに収束し、口より3.6m



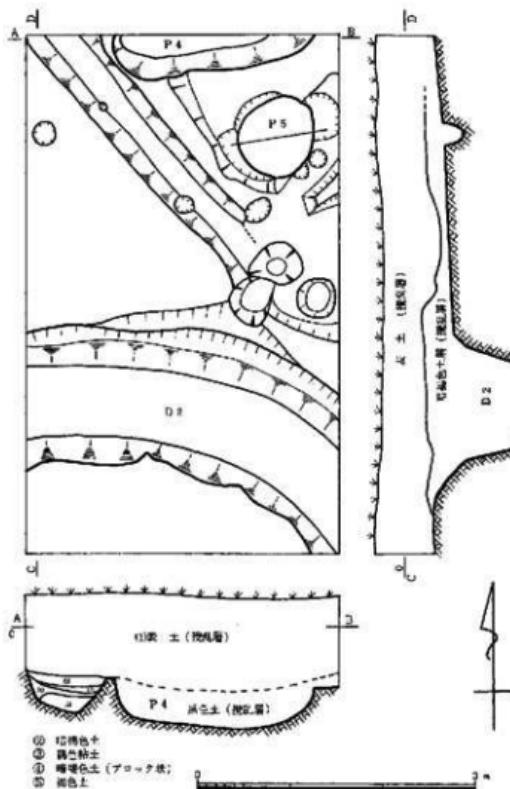
第6図 V-VI区袋状竪穴 (P_{16}) と U字状溝 (D4)

下った地点で底となり径0.45mを測る。口縁部平面はやや円に近い丸みを持つが、掘進部深いところは偏角円形の不規則的形態をなしている。

出土遺物は弥生土器の他に、植物性の遺物が出土している。土器は全レベルを通して、弥生中期後半の土器が数も多く、他に板付I、II式、城の越、後期初頭の土器が含まれている。上層の黒褐色土層、暗褐色土層には板付I、IIなどの古い土器も含まれているが、下層に向かうに従って弥生中期後半の土器が多くなり、最下層からは弥生中期終末～後期最初頭の袋状口縁をなす完形彫形土器を2個検出した。前回の井戸址調査の際にも同様の結果をえており、本遺構も弥生中期の後半から中期終末にかかる時期に作られたものであろう。他に暗褐色土層、褐色土層から、黒蛇石打製石器各1、黒色土層より完形板状岩石砲1、黒色土層の最下底部より桃果核1、最下層揚土より炭化米三粒の検出をみた。

井戸址II(P₄、S-V区 図版Vの2)

S-V区の西北隅にあり、表七を1.10m削いたところに口径0.75mのほぼ平面円形の井戸址が



第7図 S-V、S-V区平・断面図 井戸址II (P₄とD₂溝)

検出された。北半分を土層観測のために掘り残し、1.3mほど掘り込んだところで豪雨にあい北側残存層は崩壊し、調査を中途で断念したが、そのレベルまでの観測によれば、井戸口より0.95mまではほぼ垂直に下がり、そこから急激に肩広がりとなり、口より1.3m下ったところで、推定1.6mの径を数える。これまでの観察と出土遺物よりして、井戸址Iと同時期、同形態をなすと推察される。出土遺物はほとんどが弥生中期後半の土器で、井戸址Iと同じく丹塗磨研された袋状口縁、大型器台、壺、高杯の破片が出土している。

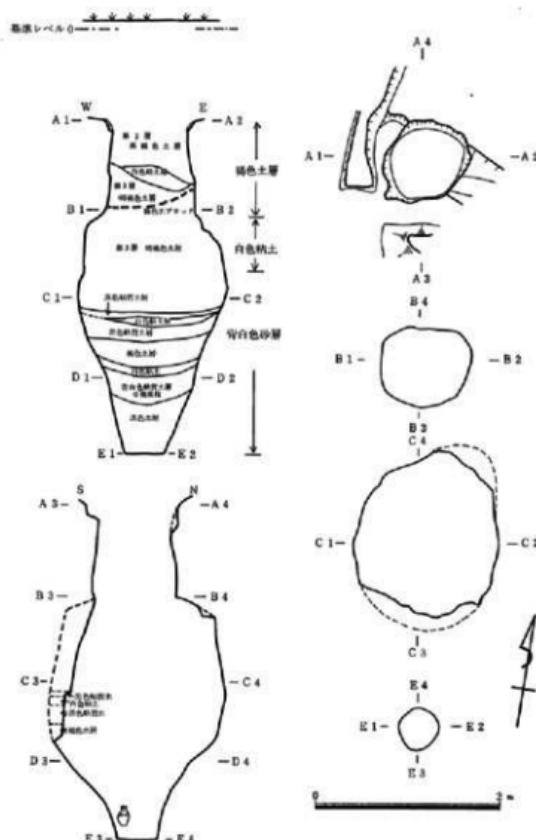
【その他の遺構】

1. 溝状遺構

D₁(S-V区)は断面逆台形をなし、上部は削平されたためか非常に浅く0.28mしかない。現存幅上部1.4m、下底部0.8mを測り、西南西より東北東に走っている。わずかに東に傾斜がある。溝内より弥生中期土器を出すが瓦器、陶

磁器片なども多く、時期決定は不可能である。 D_2 （第7図、図版Vの1）はS-VI区とS-V区にまたがって、その境界上を西より東南にゆるいカーブを持って走る。床面レベルはほとんど変わらない。断面逆台形をなし、現存上端部1.7m、底部0.9m、深さ0.9mを測る。北壁は若干削平されている。10cmごとに掘り下げた結果、多量の弦生式土器を出土するが、最下層まで、瓦器、陶磁器、糸切り底が含まれている。弥生中期の土器が多い。

D_3 、 D_4 （第5・6図）は D_2 と同一の性格を有するらしい。 D_3 はU-V区、 D_4 はV-V区にあり、連接する同一の溝でV-VI区の南壁から同区の中央で西折してU-V区の D_2 とつながっていき、その過程で袋状竪穴(P_{10})、 P_6 、 P_7 を削って走る。断



第8図 S-V区井戸址 (P_1) の平面図および断面図



井戸址1内発見の石庵丁出土状態



井戸址1底発見の整形土器の出土状態

面下底部付近で一段を有するU字形溝で現存上端復元推定1.7m・下底部0.7~0.8mを、深さ0.4mを測る。溝壁は各所で削平破壊されている。遺構内埋土は段階掘りを行なったが擾乱は甚しく、近年塵芥処理場になっていたりしたために、溝と遺物の共伴関係を把握することはできなかった。出土遺物は弥生式土器（前～中期）を主体とするが、糸切り土師、奈良～平安時代の須恵器、近世陶磁器、猪鉢、近世瓦をかなり多量に含む。他にS-V区のP₂の西側を北西より南東にかけて走る底0.4m、上端0.8m、深さ0.4mの小U字溝（第7図）があり、夜臼～弥生中期土器を包蔵している。層位的に遺物の差異はない。

2. Pit 状 遺 構

P₁ (S-V区) は D₂ の西側に連続して位置するが、その東側の一部を調査したにすぎず、D₃ と関連ある遺構か別個の Pit か不明である。平面東側輪郭はコの字の北方が S-V区 方向にのびている。遺物は P₂ と同様の内容のものである。深さ0.6mのP₂ (図版Vの2) は S-V区の西南隅にあり、これも一部を調査したのみであるが、北東の二辺が直交し、平面方形の Pit と考えられ、断面袋状をなしている。各辺はさらに西、東に伸びており正確な数値をつかみ難い。深さ0.85mを測る。夜臼土器をわずかに出土し、袋状竪穴とも考えられるが、他に弥生中期、糸切り底を有する土師をより以上に出土するので判定はできない。P₃ は S-V区 の北壁に一部出土しており、防空壕が戰時中につくられたことなどがある、擾乱されている。南端の一部を発掘したのみで、更に中央部は北側に広がるが、平面円形をなし、現在深2.1mを測る。袋状竪穴の可能性がある。P₄ (U-V区) は P₃ 住居址の南端と切り合ひ、南を D₃ によって割られているが、本来円形をなすらしい。床面は凹凸はげしい。現存最大径は1.5mを、深さ0.3mを測る。遺物は上部に板付I式土器を出土するが、下部では中期土器もある。住居址遺構の保存も考慮して、最底部を若干残しておき、その性格については今は猶予しておく。P₅ は D₃ の西端に不整形に掘り込まれた Pit で、弥生中期土器や近世磁器を出土し、その性格、年代共に明らかにすることはできない。

IV 遺物各説

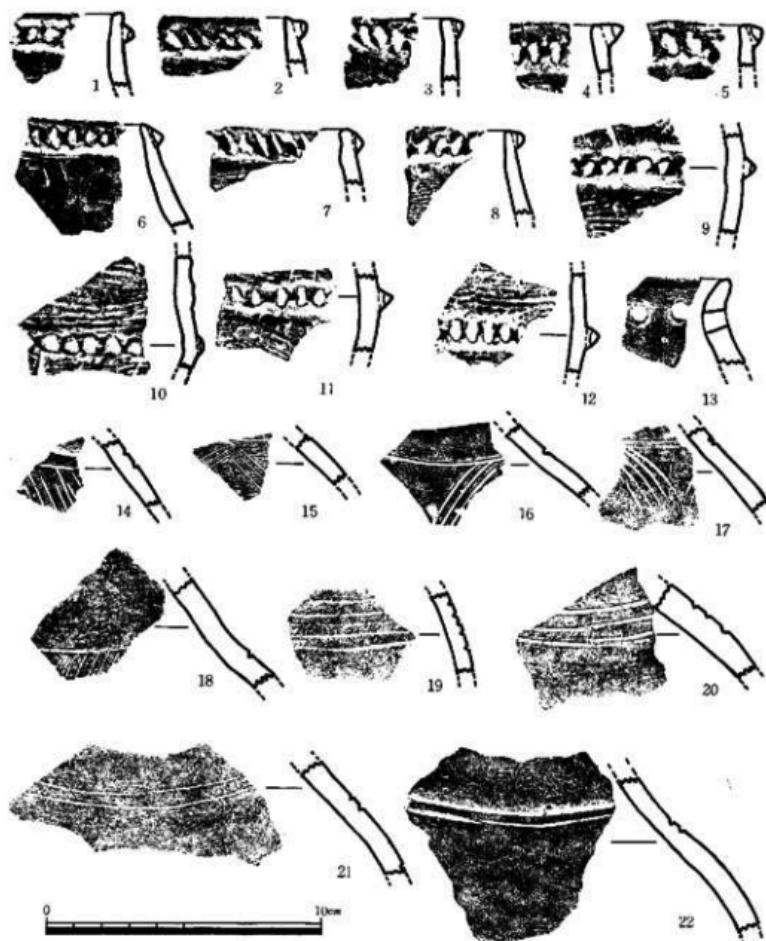
〔土 器〕

土器の出土量はかなりの数にのぼるが、ほとんど細分化したものであり、弥生時代の各時期に亘っての出土をみると、大半は擾乱層の出土である。そのため、縫状溝出土遺物を除いて、層位的把握はなかなか困難であるが、代表的なものを抽出して以下に紹介する。

夜臼式土器（第9図1～12・15、第10図23・24・26・30・31・35、第12図48）は甕、壺、高杯、鉢の各種あるが、出土量は多くない。縫状溝土器の外側に粗い貝殻系痕が全面に附され、口縁下（1）、あるいは口縁に接して（2～8）粗い刻目を持つ凸帯がめぐらされる。口縁より胴にかけて外反する器型は器高3分の1のところまで下胴部と接合し、その外側は刻目凸帯（10～12）を附す。底は断面台形（24）の円盤貼付底をなす。縫状溝土器は浅く外反する口縁（23・26）が直線的な頸部につながり、さらに球形の胴部へ繋がる転換点に一条の横沈線を附し（30・35）、連接してその下

参 考 文 献

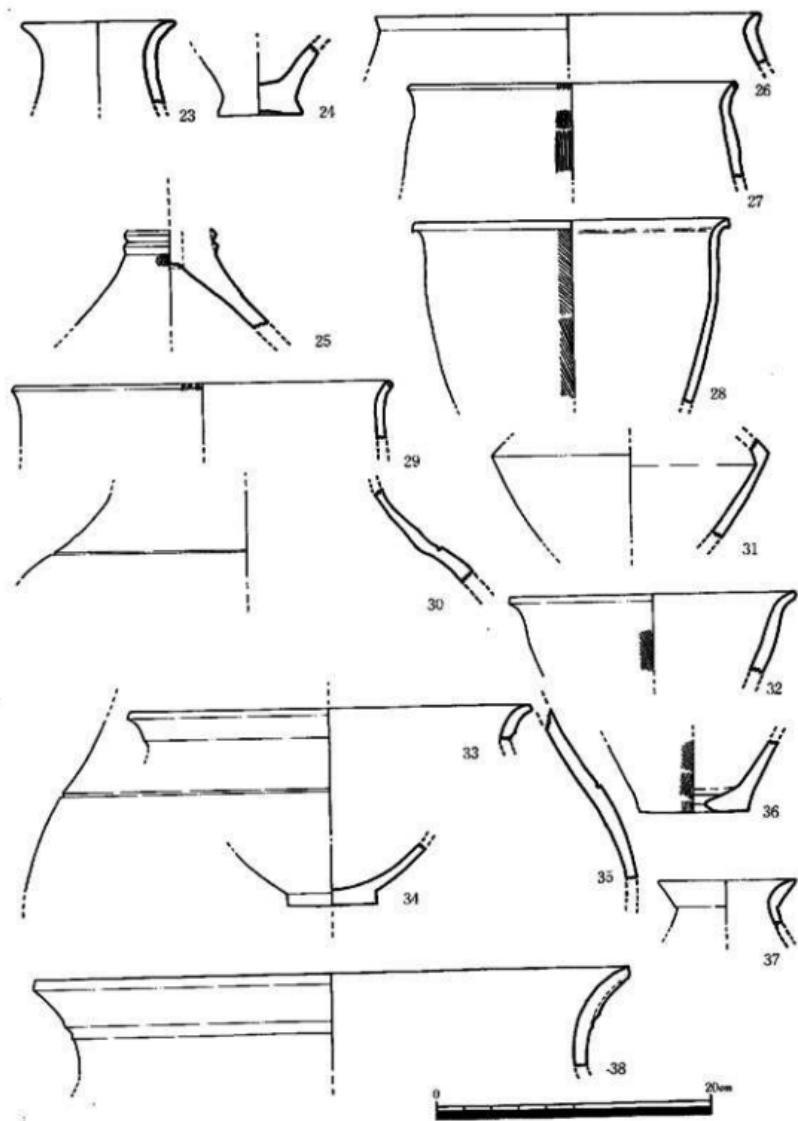
- 中山平次郎 「銅鉄鋸剣の新資料（板付北壁の遺物）」 考古学論述 第7卷第7号
森 貞次郎 「福岡県夜臼遺跡」 日本農耕文化の生成所収 1961年
森 貞次郎・岡崎敬一 「福岡県板付遺跡」 日本農耕文化の生成所収 1961年
永留久恵也 「新対馬島誌編集委員会」 新対馬島誌編集委員会 1964年
河口 寛徳 「鹿児島県高橋貝塚」 考古学雑誌第三卷二号 1965年
九州大学 「北部九州先史采集踏査の合同調査」 1966年
森 貞次郎 「九州」 日本の考古学III 弥生時代所収 1966年
「板付遺跡」 板付遺跡保存会 1968年
「案山子」 第二号 日本考古学会農業史部会 1969年



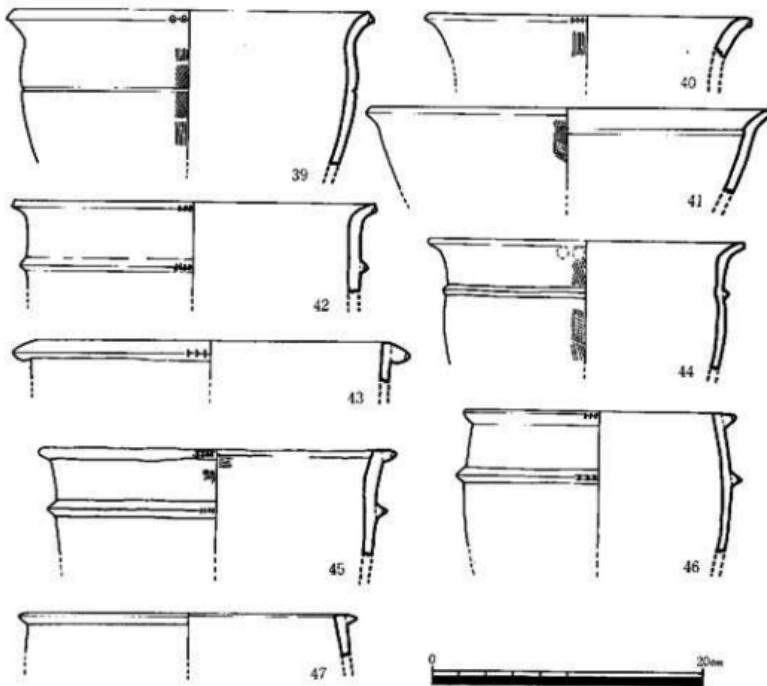
第9図 夜白・板付I式土器拓描

方には複線山形文を施文するものもある。(15)、48は肩部の位置たかく、頸部と口縁の差がなく直線的に反転しつつ起ち上かる小形の夜白式壺である。鉢は黒色磨削された、口縁断面くの字状の浅鉢の他胴上部で内行する凹折を有し、精製された良質灰土の繩文系統の鉢(31)が出土している。

板付I式土器(第9図13・14・16・16～18、第10図25・27～29・32・34・36～38、第12図49)の出土量は第10区、D₅、P₅を中心としてかなりの量を数える。變形土器(27・28・29)は口縁端一杯に刻目を配し、浅く外反した口縁が、脣張りすくなく平底底部につながる。36は同式の壺。變形



第10図 夜臼・板付I式土器実測図

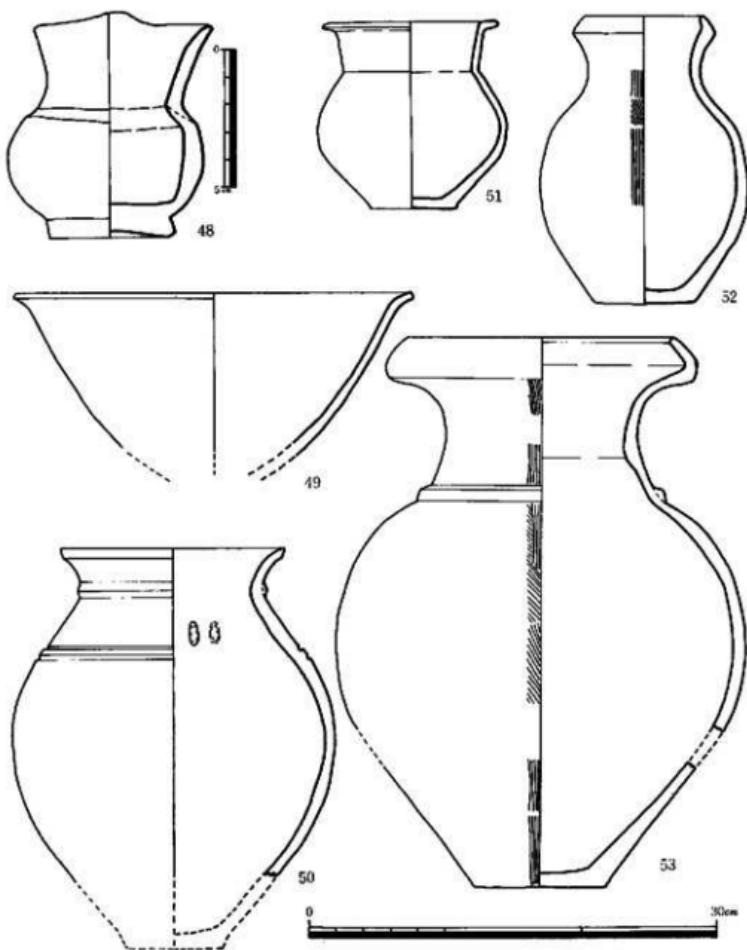


第11図 板付II・III式土器実測図

土器は口縁外面が肥厚して、短い口縁部を形成し（33・37・38）、直線的な頸部と球形の肩削部、円整貼付け（34）の底部を有す。頸肩部の接合部下には複線八字文形、複合弧状八字文形、有軸有状文（14・16・17・18）が付される。鉢には32・49があるが、僅かに屈折する短かい口縁をもつ浅鉢で、13は口縁下に二孔を有す懸垂用の壺、あるいは鉢形土器か。高环（25）は脚と环の接合部に二条の凸帯をめぐらし、直線的に小さく広がる脚をもつ。

板付II式土器（第11図39～45、第12図50）の壺形土器は如意形口縁壺の下部に刻目をめぐらすのを共通の特徴とするが、口縁下5～6cmに一条の横沈線をめぐらすもの（39）や、時期的に下降する凸帯（44）をめぐらし、それに刻目を有するもの（42）などがある。43・45は直立する口縁の外側に厚い大きな三角形の粘土帶をはりつけ、その先端に刻目を付したものだが、器形の整形に未熟さを残し、並みもはげしく、八女市龜の甲遺跡出土土器を標識とするいわゆる龜の甲式土器に共通するもので、前期土器の最終段のものである。壺形土器の出上は少ない。50はこの期の壺形土器であるが、口縁部の転換点に一条の凸帯を追らし、境のない頸肩部に二条の沈線を施す。器高が高くなり、いちぢるしい肩張りをみない。板付II式でも下降する時期のものである。

板付III式土器（第11図46・47、第12図51）のうち壺形土器（46・47）は直立する口縁の外面に断面三角形の粘土帶を貼りめぐらしたものであるが、口縁端は平坦化し、シャープな製作技法をみせ、器形の造形上進歩がうかがわれる。壺形土器は頸部が肩部と明瞭な境をもってやや外反した起ち上りをみせ、小さいながらも平坦化した口縁をみせる（51）。



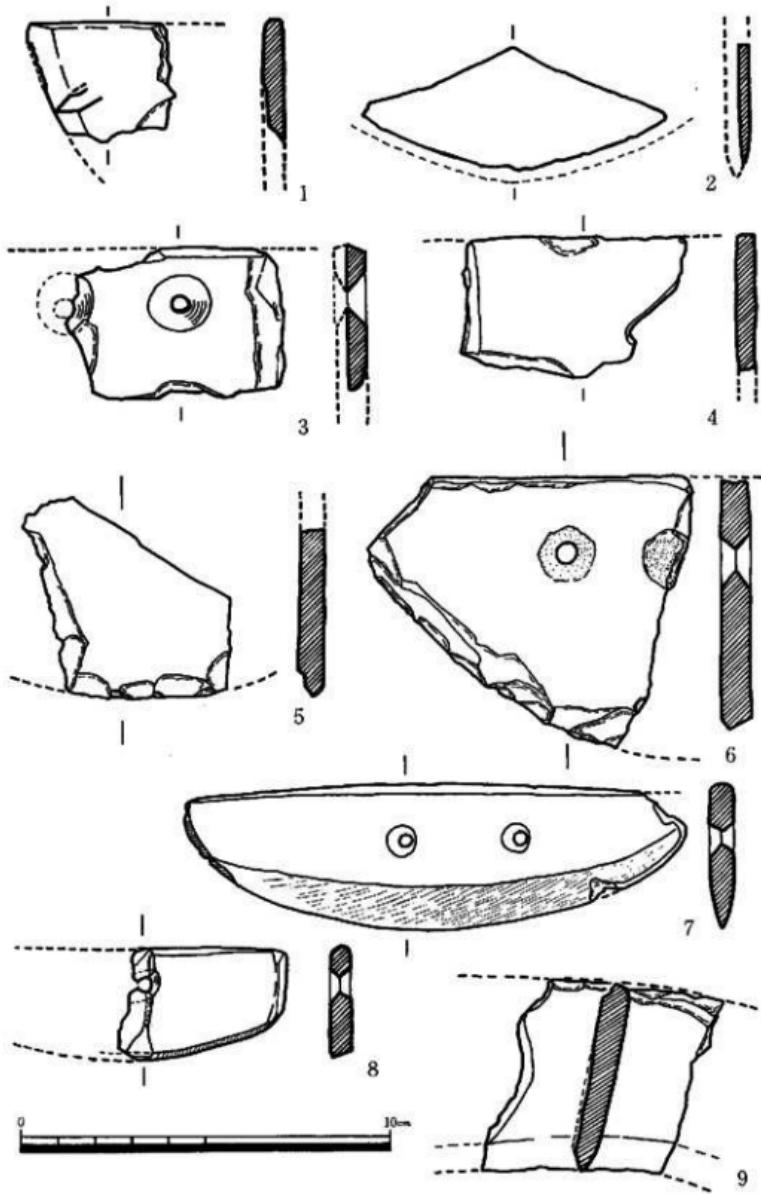
第12図 板付遺跡出土弥生式土器実測図

その他板付IV式土器である袋状口縁をもつ壺や口縁断面錐先状の壺、甕、高环なども出土して、中期中頃から後半にかけての上器の出土量は細片でありながらも量的には最も多い。52は袋状口縁をもつ壺の口縁部が内側にわずかに屈折したもので、後期最初頭に位置づけられ、53はそれがさらに著しく変化発展したもので後期前～中頃に位置づけられるものである。

(石 器)

(1) 石庵丁と石鎌 (第13図、図版VIの1・2)

石庵丁は出土包含層の時期、形態、石質を基準にして二つのタイプに分類することができる。



第13図 板付遺跡出土の石庖丁と石鋸

第13図1～6は石庖丁の古式のタイプに属するもので、いずれも材質は頁岩質砂岩よりなっている。1・3・5・6は環状溝D₂区の夜臼、板付I層に伴ったもので、2は同区の昭和43年度明大発掘区、4はS-V区の擾乱層の出土である。その一般的形態は6に典型的に示されているように、刃部外溝刃半月形をなし、背部が直をなし、器身は長さ、巾とともに大振りで、刃部は大きく外湾する。身の断面はやや滑めで直線的に刃部まで走る。一般的に大きく穿たれるのを通例とする。剥離が激しく2・3は剥離された断面のみである。

6はこの種石庖丁の製作過程を窺い知ることができる未製品で、穿孔の際敲打しているが、外形は粗く形どり、背部、刃部に研磨を加える以前に穿孔に移り、1つの孔の貫通の後、他の1孔の穿孔を施こしかけている。それも片面のみ敲打が試みられた段階で折損しており、石材のちろさと相まって敲打段階の技術的困難性を示している。立岩出土の凝灰岩石庖丁の製作方法とは異なっており、前期タイプ石庖丁の一つの作成方法を示すものである。この種古式石庖丁は、同材質のものとして第一次の調査時出土例の他、福岡市長浜貝塚、筑紫郡津古、石崎、飯塚市立岩遺跡などで知られている。6の場合で推定長さ14cm、巾7.3cmを測る。7・8は外溝刃半月形の弥生中期の石庖丁で、いずれも粘板岩性。7は井戸戸1(P)、8はS-V区擾乱層出土。7は長さ13.9cm、身巾4.0cmを測る完形石庖丁で、身の長さに比して身巾の狭い、横長形で、器身中央部はやや厚いつくりをみせ、孔径が小さく明瞭な歯を有す典型的な中期の石庖丁である。刃は鋭い。器身は刃と直角に、刃部は刃と平行の中延一側紙の痕跡をよく残す完好の石庖丁例である。8は7と同様の特徴を示し、孔の部分で半折しているが、長さ復元推定10cm、巾3cmのやや小型の石庖丁である。圓面の裏側部分にも不明瞭なかすかな刃を有すが、片刃に近い鋭い刃部を有し、側縁部にいたると刃付けは裏面に変る。

石鎌(9)は先端、基部を大きく失した破片で、全長を詳しきらかにしないが、巾5.0、厚さ0.8cmを測る。背部には製作時の打製痕を残したものであるが、器身は全体に研磨が加えられ、刃付けもなされている。身の一部に剥離があり、刃にも傷こぼれが認められる。頁岩質砂岩を材料としているところからみて、前期の石鎌か。V-VI区擾乱層出土。

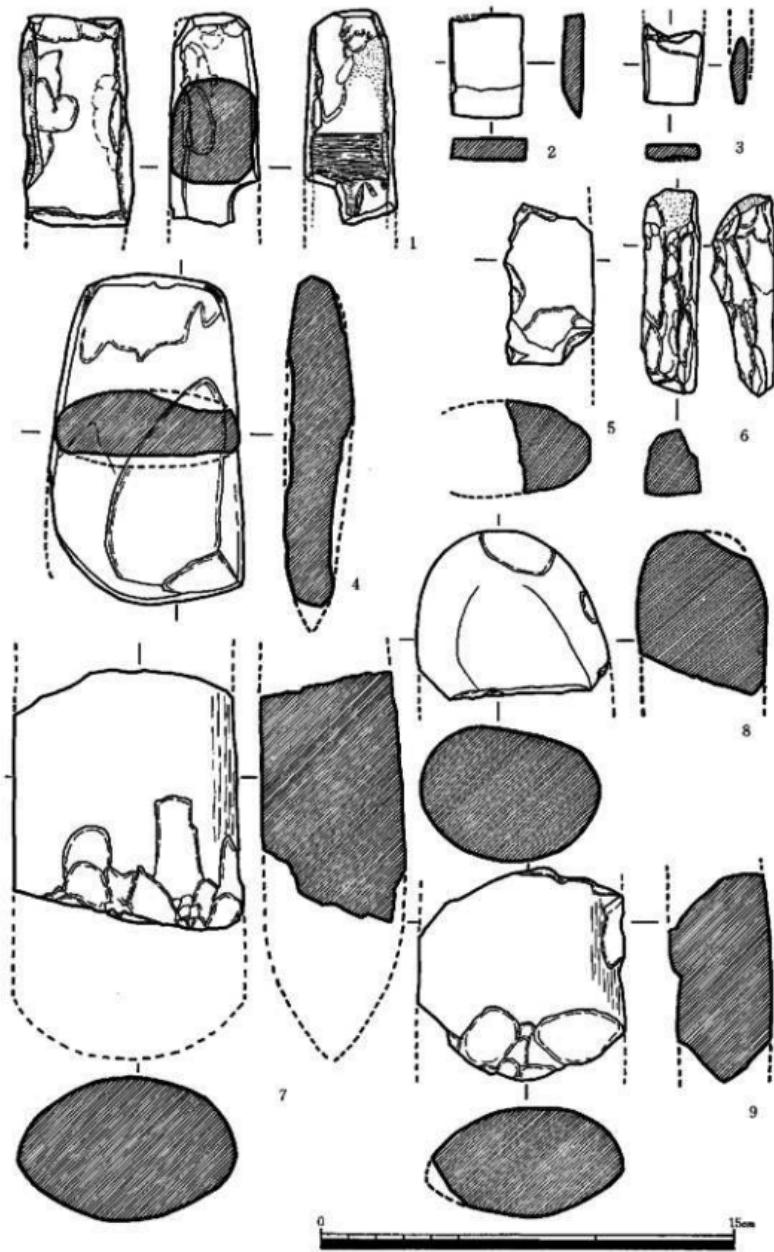
(2) 石斧 (第14図、図版VIIの1～7)

石斧類には太形輪刃、抉入石斧、扁平片刃石斧の三種類の磨製石斧がある。

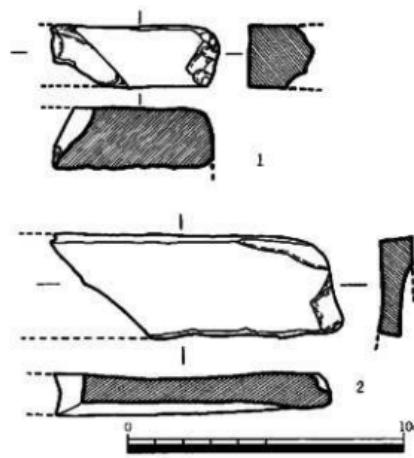
抉入石斧 (第14図1、図版VIIの4) は1点で環状溝Pの夜臼、板付I層より出土したものである。頁岩質で抉入部より先端部分を欠失している。一部の敲打面を残して全面研磨されているが、部分的な表面の剥離はいちぢるしい。方柱状をなし、背部に丸味をもつがほぼ方形といえる断面を持つ。腹部の抉入部より上方は敲打によって仕上げられている。抉入部は一段で、抉は僅かに1.5mmしかなく、通常のものに比して非常に浅い。佐賀県宇木汲田、長崎県対馬井手遺跡より、いずれも弥生前期の包含層に伴って出土した抉入石斧と同様の特徴を持っている。長さ7.5、高さ3.1、腹部巾2.8、抉入部巾1.8cmを測る。

扁平片刃石斧 (第14図2・3・6、図版VIIの1・2・3) は3例あり、14図の2・6は頁岩質である。2・3は完成品で2は袋状堅穴(P₁₀)内、後者は環状溝(D₄)の昭和43年度発掘カ所よりの出土である。2は背の一部を使用時打撃により破損しているが、長さ3.7、巾2.6、厚さ0.7cmを測る。ほほ全面が研磨され、縦断面背部は全体的に緩い円凸をもち、腹部は直線的であるが刃部付近では内溝した円味をもつ。刃は鋭い。3は上半を欠失して、現長2.9、巾2.1、厚さ0.5cmを測り、断面、腹背部尖に緩かな円味をもつ。刃部先端は再利用加工のためか、砥石による研磨が加えられて平坦化している。6は環状溝(D₂)夜臼、板付I層出土の未製品で、腹部と側面の一部は研磨が進んで仕上げに近い状態にあるが、背部は打製の痕を全面にはげしく残し、頭部付近にはいまだわざかに敲打が加えられているにすぎない。長さ7.9、高さ2.3、巾2.0cmを測る。

太形輪刃石斧 (第14図4・5・7・8・9、図版VIIの5・6・7) のうち1は画面に剥離があるが未完成品で、長さ12.0、巾6.7、厚さ2.5cmを測る。器身薄く、身の中央より刃部にかけてはよく研磨されているが、頭部にかけては敲打痕が著しく残っている。刃は使用磨滅によって丸くなり、身の片側に激しく磨滅しているのはアックス様に装備使用されたのか。D₄出土で古式の

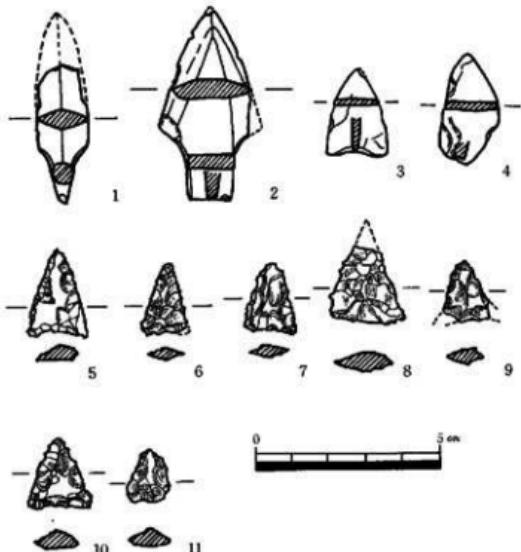


第14図 板付遺跡出土石斧類



第15図 板付遺跡出土砥石

4)は、S-VII、S-VI、S-Vの擾乱層中山上で、1は先端を欠いているが完形であれば5.7cmにはなる。断面偏棱形、茎は短かく、先端は尖っている。鍔はあまり明瞭ではない。柳葉形石鎌でも短い小型の部類に属し、第一次調査時出土のものや福岡市有田、佐賀県柏崎出土品と同種に



第16図 板付遺跡出土石鎌

特徴を備えた石斧である。5・6・7・8・9はいわゆる太形船刃石斧で、5は頁岩質、7・9は玄武岩製である。5(環状溝10区)は身の側縁の一部、8(織状溝D_b、夜白、板付Ⅰ層)は頭部のみである。7・8は擾乱層中出土で頭部、刃部を大きく欠損しているが、5・8より時期的に下る弥生中期のものである。第一次調査の際、板付Ⅳ式土器に同種のものが伴出している。福岡市今宿今山産の玄武岩石斧である。

(3) 砥石 (第15図、図版Ⅷの8・9)

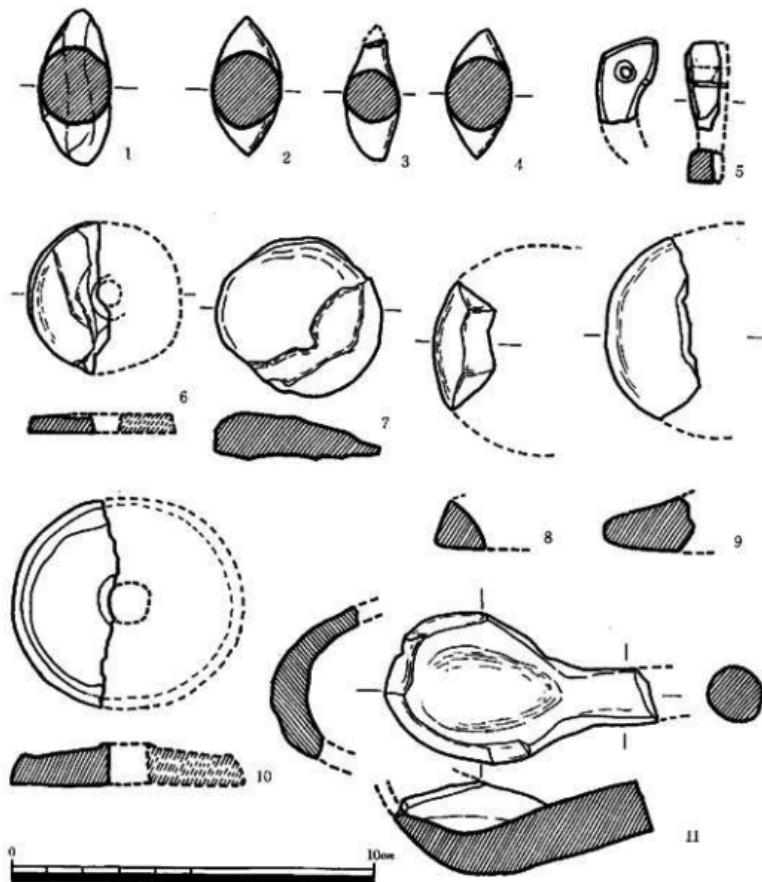
1・2ともに肌面の細い細緻で、1はU-VI区のD_b内、2はP_b内出土で、いずれも破片である。1は白色頁岩質で上面および左右の三面を砥石として利用している。時期不明。2は弥生時代のもので上・下面と側面の片方に利用の痕を見るが上面の磨滅著しい。他に中砥程度の砥石も検出されている。

(4) 石鎌 (第16図、図版Ⅸの1~11)

磨製石鎌 (第10図1~4、図版Ⅸの1~

属するもので、前期に位置するものであろう。

2は黒色頁岩質で、身巾広く扁平で闊抉を有さずして、扁平、方形の巾広い表がつくりだされている。刃は両側縁に平行に付されている。我国ではほとんど他に出上例をみない珍品で、シャープな作品である。中国東北地区や朝鮮原道出土品に類似のものがある。長さ5.3、闊巾推定2.9、厚さ0.4~0.5cm。擾乱層出土。3・4は蛇文岩製で3は闊部抉りを有し、茎をもたない薄手の舟鎌である。表面研磨は十分になされておらず、刃も先端付近に僅かに付されているだけであ



第17図 板付遺跡出土土製品および滑石製品

る。長さ2.2、闊部巾1.7、厚さ0.2cm、4は3の未製品で両側縁が研ぎ出された段階のもので、折りはいまだ付されていない。表面研磨はなされておらず、両側を形成する部分の側縁のみを磨いている。祭祀的用品かとも考えられる。この形態のものは他例によれば、弥生中期に伴って出土している。

打製石鏃（第16図5～11、図版図の5～11）は井戸址I（P₁）・環状溝（D₁）や壠乱層出土のものが10点近く出土している。ほとんどが闊部に浅い折りをもち、等辺三角形という弥生的特質を備えた形式の打製石鏃ばかりである。8のみは折りがない。ほとんどが黒蠅石で7のみはサヌカイト製。長さは1.5～2.8、巾1.3～2.1cmまであるが、長さ2cm前後のものが最も多い。11は環状溝（D₁）の夜白、板付1層出土。5・6・7は井戸址I（P₁）の出土で5は暗褐色上層の下部に伴った、或いは中期にまで下るものか。

〔土製品と滑石製品〕

投弾形土製品（第17図1～4、図版7の12～15）はいずれも両端が尖がる形式のもので、2・4は上・下が相称となり、全体にバランスのとれた好品で1は歪みと凹凸があり、3は片方先端が折れており、中心部が反対方向に片寄っている。大きいものは長さ4.2、厚さ2.9cmあり、2・4は長さ3.8、3.5、厚さ1.9、1.8cmをはかる。いずれも擾乱層の出土。

紡錘車（第17図6～10、図版7の16～20）は統計5個出土しており、1・2の2つは滑石製品である。1は中央孔部で折半しているが円板形をなし、上下両面および側面ともよく磨かれている。推定直徑4.2、厚さ0.5cm。2も滑石製品であるが未製品で上下両面とも打削を残したもので、かなりの凹凸があり、上面の片方はふくらんでいる。しかし、側面には大部分円板形を型どるために磨研が施されている。直徑4.3～4.5cmを測る。8・9・10は土製紡錘車で8は周縁の一部を残すのみであり、円板形をなすのか、つまみを有するのか判じ難いが、かなりの厚手で、復元長5.5cm前後、縁部の厚さ1.3cmを測る。9も破片であるが、 $\frac{1}{2} \sim \frac{1}{4}$ は残存している。周縁上部より、中央部に向うに従い厚くなってきており、つまみを有する紡錘車と考えられる。復元長6、厚さ現存最厚部で1.5cmを測る。10は破片であるが円板形紡錘車の典型で、孔の周間にふくらみを有す。長さ5.8、厚さ周縁で0.9cmを測る。10は環状溝10区の夜臼・板付I層、8は豎穴住居址（P₆）床面、7はP₁₀内出土。

勾玉（第17図5、図版7の22）は環状溝（P₅）の夜臼・板付I層に伴って出土したもので、滑石製品である。尾部を欠失している。いわゆる勾玉のふくらみと、丸みを欠き平板であり、そのため断面方形をなす。頭部の崩壊部は直線的に折れ曲がり、縫をもって区画する。頭部のくびれ部には刻線を有す。孔は両ぐりとなって表面は研磨されている。片面は剥離しているが、現長2.3、厚さ0.7、孔径0.5cmを測る。弥生時代勾玉とは異なり縄文時代勾玉の伝統をそのまま残している。

匙形土製品（第17図11、図版8の21）は柄部の一部と、側縁上部を欠失している。内外面黄褐色を呈し、外面は火に罹ってすけていている。現長7.1cm、柄部長さ2.5cm。柄部は断面円形をなし1.6cmを測る。匙部は長楕円形をなし、内面は底長2.5cmを測る。

T-V区擾乱層出土。

V 板付遺跡出土の動物骨

この遺跡のJ-V区の貝塚地より検出した動物骨片は次の如くであっていずれも細片である。獸骨（鹿2片、猪3片、不明7片、鳥骨2片、魚骨17片）。

上記のうち、いくらか動物の種類の判明するものは右表のとおりである。

いずれも、縄文・弥生時代の貝塚に普遍的なものであるが、ただ一つ注目すべきは鳥骨上腕骨の破片であって、これが確かに鶏であるか否か、我が国の家禽の初現に関連して専門家の査定を乞いたいところである。（永井）

VI 弥生時代遺物包含層の花粉分析

I まえがき

1969年7月25日～8月12日にかけて福岡市教育委員会により発掘調査された福岡市板付遺跡における井戸址I・溝（環状溝D₆）に堆積している弥生時代遺物包含層の花粉分析を行い花粉・孢子群の検討をした。

近年、気候変化・植生の変遷など古環境の解明や農耕の起源などの問題解明のため花粉学の考



	出 所	層 位	動物種	部 位	備 考
1	D 5環状溝	貝 層	鳥	左側上腕骨遠位端	鶴に最も近い形をとるが、精査を要する。
2	D 5環状溝	貝 層	魚	鱗 条	沿海のやや大型の魚か?
3	D 5環状溝	貝 層	魚	右側歯骨	「へだい」と思われる。
4	D 5環状溝	貝 層	猪	下顎左側犬歯 エナメル質	右端即ち歯根側が焼けている。
5	D 5環状溝	貝 層	猪	下顎左側犬歯 尖端部	右端の断端はすり磨いている。
6	D 5環状溝	貝 層	猪	下顎左側 第 2 切歎	大きい
7	D 5環状溝	貝 層	鹿	下顎左側 第 2 切歎	大きい
8	D 5環状溝	貝 層	鹿	下顎左側 第 3 大臼歎	通常の大きさで成歎

第10図 板付遺跡D₅(W-VI区)貝層発見の動物骨

	土層名	試料略号	
第2層	黒褐色土層	G	弥生前期～後期前半
下部	白色粘土層		
黒色	粘質砂層	F	弥生中期後半主体
褐色	土層		
青白色	粘質土層		
黒色	土層下部	E	
黑色土層下部出土壺中の土		D	弥生後期初頭
貝層		C	
貝層		B	
貝層		A	

第19図 分析に用いた井戸社1・溝試料

した。井戸と溝の七層は連続していないので直接の対比はできないが、包含遺物よりみれば、井戸Ⅰ (P_5)において、最下層の黒色土層には弥生中期終末～後期の最初頭、最上層の第2層黒褐色土層には後期初頭を示す土器が出土しており時間的差異はない。溝 (D_5)においては、1・2・3層は擾乱層、4層は不明、5層貢層には板付II式土器、6・7・8・9層には板付I式・夜白式土器が出土し、弥生前期を示している。

(2) 試料の処理

処理にあたっては、黒色～褐色土では200g、白色～青白色土では400gをとて47%フッ化水素酸で鉱物質物質をはば完全に溶かし、水酢酸、エルドマン氏液（無水酢酸9、硫酸1）で処理し、グリセリンゼリーで封じた。なお溝上層試料A・B・Cは多量の貝殻を含むため事前に塩酸で処理した。各試料10枚前後、合計115枚の永久プレパラートを作成した。

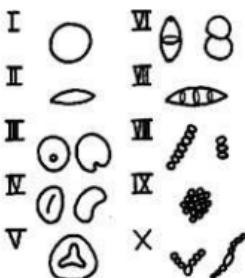
III 分析結果と検討

(1) 分析結果

各試料とも数枚のプレパラートについて検鏡した結果、井戸の青白色粘質土層、白色粘土層、褐色土層はほとんど花粉・胞子を含まないことがわかった。また他の試料では森林型花粉のしめる割合が少なく、草木型花粉および胞子が多くの割合をしめることが判明したので上記の3試料を除く7試料につき、300~700粒の花粉・胞子を同定した。同定に際しては一部のものについては、アセトリシス処理をほどこした現生植物花粉と比較し、多くは幾瀬(1956)⁽¹⁾の検索表などにより自然分類を行なった。なお植物和名は牧野新日本植物図鑑にしたがった。胞子についてはじゅうぶんな同定が困難なため、第20団に示したように便宜的に10の代表的形態に分類した。

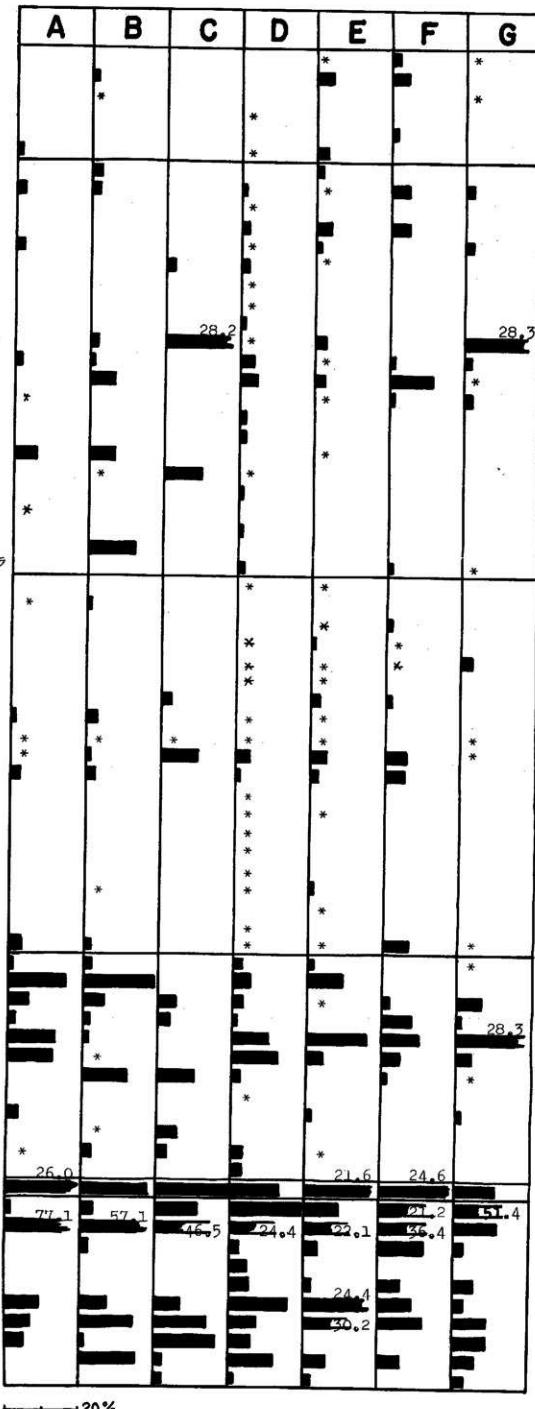
7 試料よりえられた花粉・胞子の出現率をそれぞれ第21

(1) 鶴瀬まさ (1956): 日本植物の花粉- 304 p.p., 74 p.l.s., 広川書店 (東京)

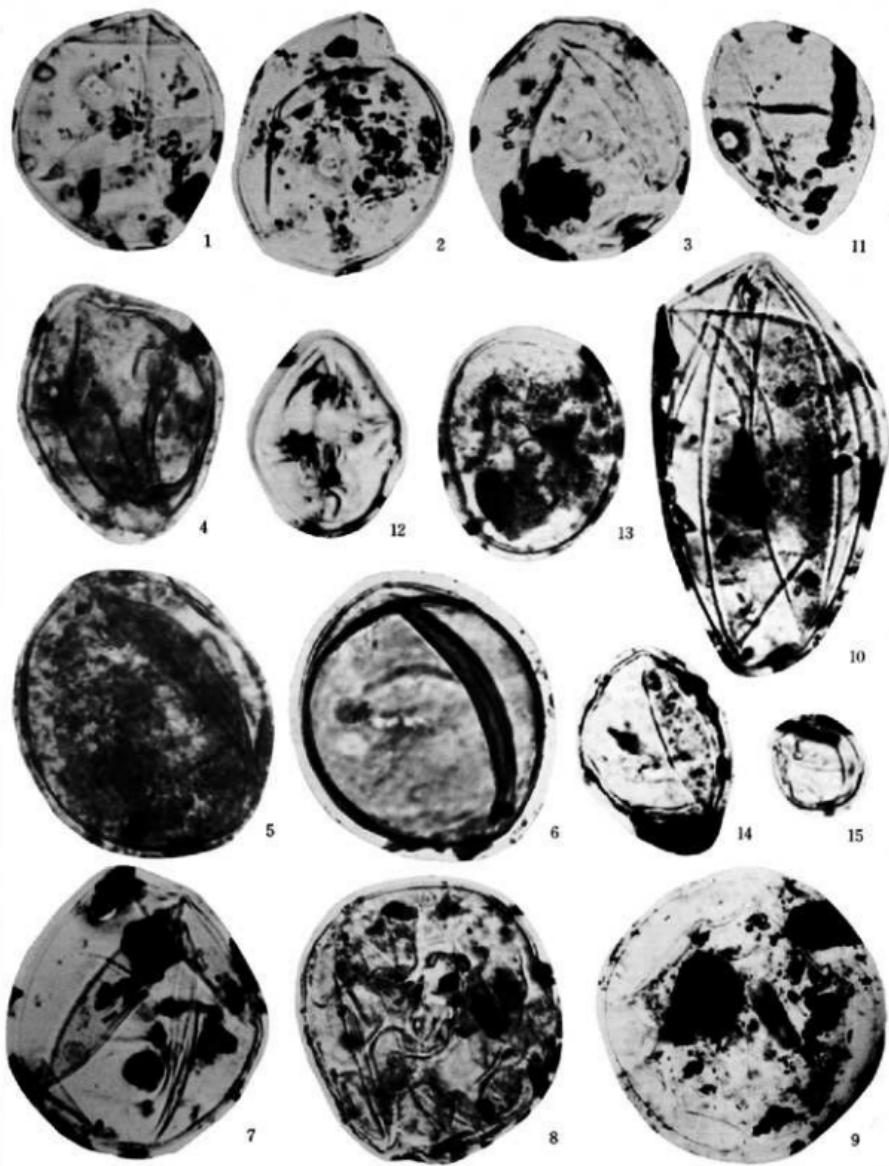


第20図 病出胞子の形態分類

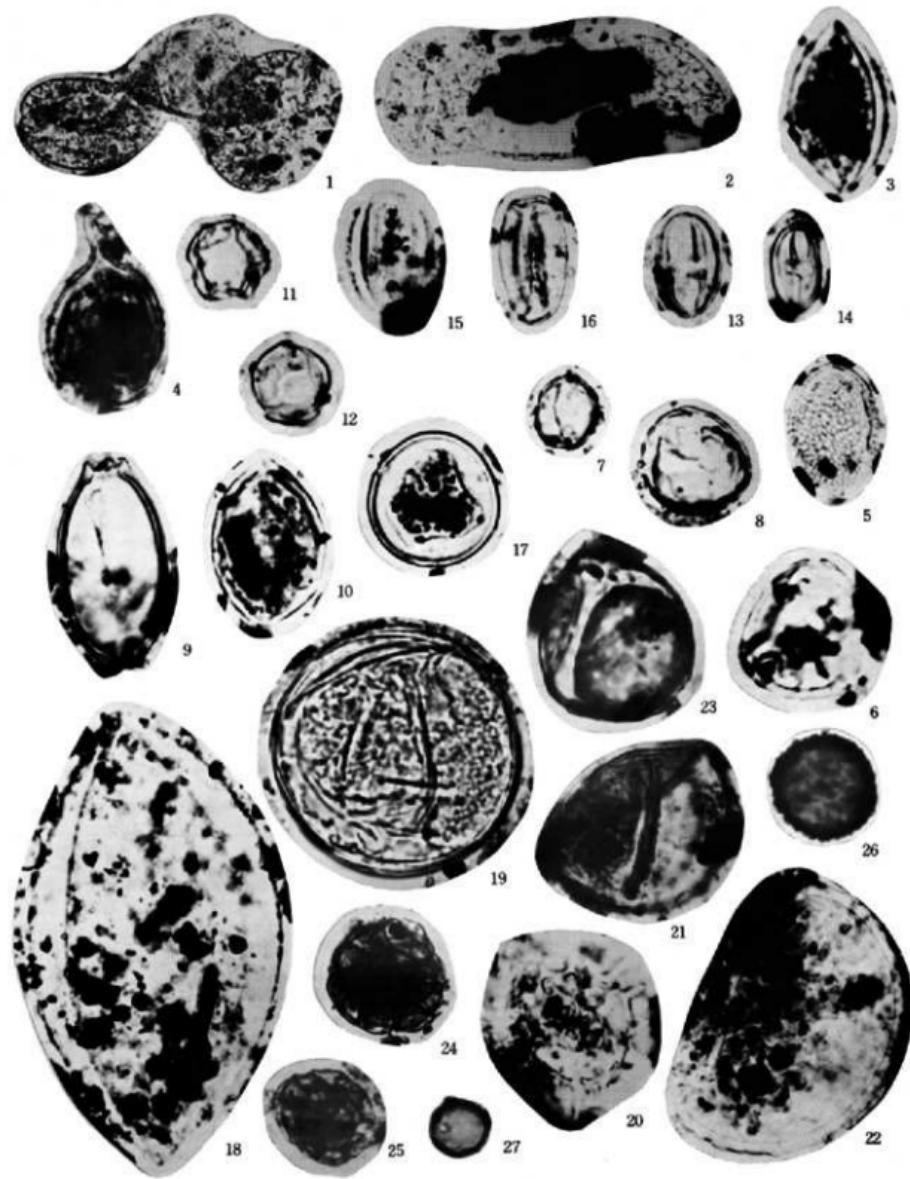
1. *Ginkgo biloba* イチョウ
 2. *Pinus* マツ属
 3. *Cryptomeria* スギ属
 4. *Torreya nucifera* カヤ
 5. *Cupressaceae* ヒノキ科
 6. *Juniperaceae* ネズ科
 7. *Piper kadsura* フウトウカズラ
 8. *Salix* ヤナギ属
 9. *Populus Sieboldii* ヤマナラシ
 10. *Myrica rubra* ヤマモモ
 11. *Juglandaceae* クルミ科
 12. *Betulaceae* カバノキ科
 13. *Carpinus Laxiflora* アカシデ
 14. *Corylus* ハシバミ属
 15. *Ostrya japonica* アサダ
 16. *Alnus* ハンノキ属
 17. *Castanea crenata* クリ
 18. *Quercus* コナラ属
 19. *Castanopsis cuspidata* ツブラジイ
 20. *Aphananthe aspera* ムクノキ
 21. *Moraceae* クワ科
 22. *Magnolia* モクレン属
 23. *Cinnamomum camphora* クスノキ
 24. *Ilex* モチノキ属
 25. *Acer* カエデ属
 26. *Tilia* シナノキ属
 27. *Theaceae* ツバキ科
 28. *Trachelospermum asiaticum* テイカカズラ
 29. *Aristolochiaceae* ウマノスズクサ科
 30. *Balanophoraceae* ツチトリモチ科
 31. *Polygonaceae* タデ科
 32. *Chenopodiaceae* アカザ科
 33. *Stellaria* ナデシコ科
 34. *Mirabilis jalapa* オシロイバナ
 35. *Brasenia schreberi* ジュンサイ
 36. *Nuphar japonicum* コウホネ
 37. *Nymphaeaceae* スイレン科
 38. *Nymphaea tetragona* ヒツジグサ
 39. *Nelumbo nucifera* ハス
 40. *Ranunculaceae* キンボウケ科
 41. *Leguminosae* マメ科
 42. *Euphorbiaceae* トウダイグサ科
 43. *Araliaceae* ウコギ科
 44. *Umbelliferae* セリ科
 45. *Nymphoides indica* ガガブタ
 46. *Boraginaceae* ムラサキ科
 47. *Campanulaceae* キキョウ科
 48. *Compositae* キク科
 49. *Typhaceae* ガマ科
 50. *Potamogeton* ヒルムシロ属
 51. *Hydrocharis dubia* トチカガミ
 52. *Blyxa ceratisperma* スプタ
 53. *Gramineas (small)* イネ科(小型)
 54. *Oryza sativa* イネ
 55. *Triticum sativum var. vulgare* コムギ
 56. *Cyperaceae* カヤツリグサ科
 57. *Lemnaceae* ウキクサ科
 58. *Acorus calamus* ショウブ
 59. *Liliaceae* ニリ科
 60. *Iridaceae* アヤメ科
 61. 不明花粉
 62. 胚子 I
 63. II
 64. III
 65. IV
 66. V
 67. VI
 68. VII
 69. VIII
 70. IX
 71. X



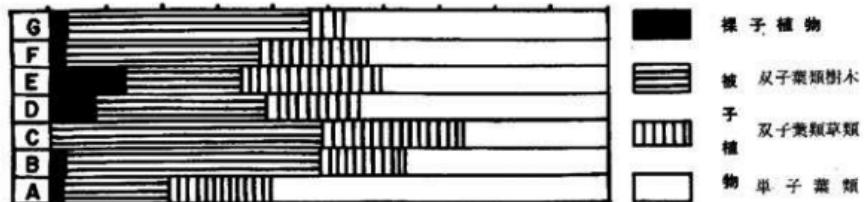
第21図 井戸址1・満土層の花粉・孢子頻度図(*印は1%以下)



第22図 1～4 *Oryza sativa* イネ (1・2は試料D、3は試料E、4は試料B) 5～9
Triticum sativum var. *vulgare* コムギ (5は試料C、6は試料B、7～9は
 試料D) 10～15 Gramineae イネ科 (10は試料Dで *Zea Mays* トウモロコシ?
 11は試料F、12は試料G、13は試料A、14・15は試料D) 各図は ×1,000



第23図 1・2 *Pinus* マツ属 (1は試料B、2は試料E $\times 630$) 3 *Ginkgo biloba* イチョウ属 (試料E $\times 1,000$) 4 *Cryptomeria* スギ属 (試料B $\times 1,000$) 5 *Salix* ヤナギ属 (試料E $\times 1,000$) 6 *Myrica rubra* ヤマモモ属 (試料E $\times 1,000$) 7・8 *Juglandaceae* クルミ科 (7は試料E、8は試料G $\times 1,000$) 9・10 *Betulaceae* カバノキ科 (9は試料D、10は試料E $\times 1,000$) 11・12 *Alnus* ハンノキ属 (11は試料C、12は試料G $\times 1,000$) 13・14 *Castanea crenata* クリ (13・14は試料D $\times 1,500$) 15・16 *Quercus* コナラ属 (15は試料F、16は試料D $\times 1,000$) 17 *Aphananthe aspera* ムクノキ (試料D $\times 1,000$) 18 *Magnolia* モクレン属 (試料B $\times 1,000$) 19 *Lauraceae* クスノキ科 (試料B $\times 1,000$) 20 *Nuphar japonicum* コウホネ (試料D $\times 630$) 21 *Nymphaea tetragona* ヒツジグサ (試料B $\times 1,000$) 22 *Nelumbo nucifera* ハス (試料B $\times 630$) 23 *Nymphoides indica* ガガブタ (試料E $\times 1,000$) 24・25 *Potamogeton* ヒルムシロ属 (24は試料A、25は試料D $\times 1,000$) 26 *Hydrocharis dubia* トチカガミ (試料G $\times 1,000$) 27 *Lemnaceae* ウキクサ科 (試料D $\times 1,000$)



第24図 裸子植物、被子植物双子葉樹木、草類、単子葉類の頻度図

同に示す。第21図では、裸子植物、被子植物の双子葉類樹木、草類、単子葉類、胞子の順に花粉・胞子別に100%としそれぞれの割合を示している。同じ科で科名・属名・種名を並記しているのは、科、属および種まで判明したものを別個にあつかい出現率を表わしているためである。

(2) 検 討

(a) 井戸・溝土層の花粉・胞子

井戸・溝土層の7試料の花粉の胞子に対する割合は、試料Aでは40%、Bでは53%、Cでは48%、Dでは69%、Eでは60%、Fでは65%、Gでは80%である。溝上層では胞子がひじょうに多い。

第24図は第21図に基き7試料の花粉について裸子植物、被子植物双子葉類樹木、双子葉類草類、単子葉類の頻度を示した。

全体的にみて、裸子植物は少ないが、そのうちイチョウ・マツ属が多い。いわゆる広葉樹はほぼ40%をしめるが、常緑と落葉樹の比は一定しない。ヤナギ属・ハノキ属・コナラ属・クリはかなりの割合をしめている。森林型花粉からみるとA-Gの示す時代、すなわち弥生時代を通じて現在の板付周辺の気候より暖かい気候を示す植物はみうけられず、むしろ暖帯常緑広葉樹林、温帶下部落葉広葉樹林の植物が大部分をしめている。いくらかは尾辺山地よりもたらされた花粉であるとみなしても現在よりやや冷涼な気候下にあったものと推定される。このことは、藤(1969)⁽²⁾のあつかった同時代の岡山県津島遺跡における推定気候とよく一致する。双子葉類草類はほぼ20%をしめ、スイレン科のコウホネ属・ヒツジグサ・ハスの湿水性植物が多い。単子葉類はほぼ40%をしめ、湿水性植物のガマ科、ヒルムシロ科、トチカガミ科、ウキクサ科の各種とイネ科の各種が多くをしめる。7試料とも湿水性植物が多くみられるることは、井戸・溝とともに常に淡水をたたえた状態にあったものと推定される。イネ科は花粉全体のはば20%の高率を示すが、40μ以下の雜草類とイネ・コムギの穀類の比は一定しない。弥生前期の溝土層試料B・Cではイネ・イネ科雜草類はきわめて少ないとコムギが10%を越える。このことは溝のごく近くに畑地が存在した可能性を示している。しかし時代的にはほぼ同じと考えられる溝土層の試料Aと弥生中～後期の井戸土層各試料では、イネがかなりの割合をしめ、ごく近くに水田が存在したと推定できる。

(b) 井戸土層の花粉・胞子

試料D・E・F・Gの花粉構成内容はかなりよく類似している。イチョウ・ヤマモモ・ティカカズラは井戸土試料には多数あるが、溝試料ではほとんどみられない。花粉以外の植物遺体として

(2) 藤 利雄(1969)：岡山県津島遺跡の花粉学的研究。

考古学研究、16卷2号、46~65pp、figs. 1~12、pls. 1, 2。

は、モモの果核1個と炭化米が数粒検出されている。後者とイネ花粉の同層からの多産とはよく一致し、水田の存在を裏付けている。

(c) 溝土層の花粉・胞子

試料A・B・Cの花粉構成内容はほぼ同様の傾向をもつ。A・Bではヤナギ属、モクレン属、Bではツバキ科、Cではハンノキ属が卓越する。胞子は3試料とも50%前後を示している。この原因については偶然としないが第20図に示したII型のレンズ状体が特に多い。

IV ま と め

以上の結果をまとめてみれば、

1. 井戸・溝とも常に淡水をたたえた状態にあったと推定される。
2. 弥生前期において溝付近に畑地が存在した可能性があり、また同時期の溝付近および弥生中期～後期における井戸周辺に水田の存在が推定される。
3. 森林型花粉からみると弥生時代を通じ現在の板付周辺の気候よりやや冷涼であったと推定される。
4. 今後に、古環境の詳細な究明、イネ科花粉の研究を通じての農耕問題の究明などが重要な課題として残される。（西田）

VII おわりに

1. 今年度の発掘調査によって次のような結果を得ることができた。

W・VI区より10区の通津寺境内東部の環状溝は上端はある程度削平されているが、原形に近い形で残存しており、層位の擾乱度も少なく、遺溝の価値は十分に高い。

しかし、堅穴住居址（P₈）、袋状堅穴（P₁₀）、U字溝や残余の溝やPitが示すように表下15m、深い所では2m近くも擾乱されている状況であり、正確な遺構の年代を決定することが困難であると共に、地山掘り込みの浅い遺構はほとんど削平しつぶされたと考えられる。従って、井戸址のような掘り込みの深い遺構のみしか良好な形で残存していない。

2. 明らかに弥生時代の遺構として堅穴住居址1、袋状堅穴1、井戸址2を得、環状溝内生活場の一部を明らかにすることができた。

3. 出土遺物についてみれば石庖丁、石斧類、石錐、紡錘車、投弾形土製品など、前回までの調査例に加えて、弥生時代の石器の幅年、組合せに新例を加えることができ、なんざく、弥生最古の勾玉、有茎の削平磨製石錐、匙形土製品などの珍品を得ることができたのは貴重である。

4. 環溝内の小貝塚層の様態は板付II式期に海岸部平野の定着民が繩文的な単純生産的生活への依存度から離脱=独立を示したことこれまでの結果に加えて再度裏付けた。

5. 環溝内小貝塚層および井戸址1の資料による花粉分析の結果、当時の食料性食物の可燃性や積性の一資料を得たことは、今後の古環境、植生、古気候を追求していくための一資料となるであろう。板付II式期に小麦花粉が認められたことは、畑作の開始期に絡んで、今後の研究の参考となるであろう。



2 (下)
W VI区・D₁環溝発掘状態
第10区環溝出土状態(北より)



1 (a) P₆ · 竖穴住居址出土状态
W VI 区 · P₆ 墓沟内遗物出土状态

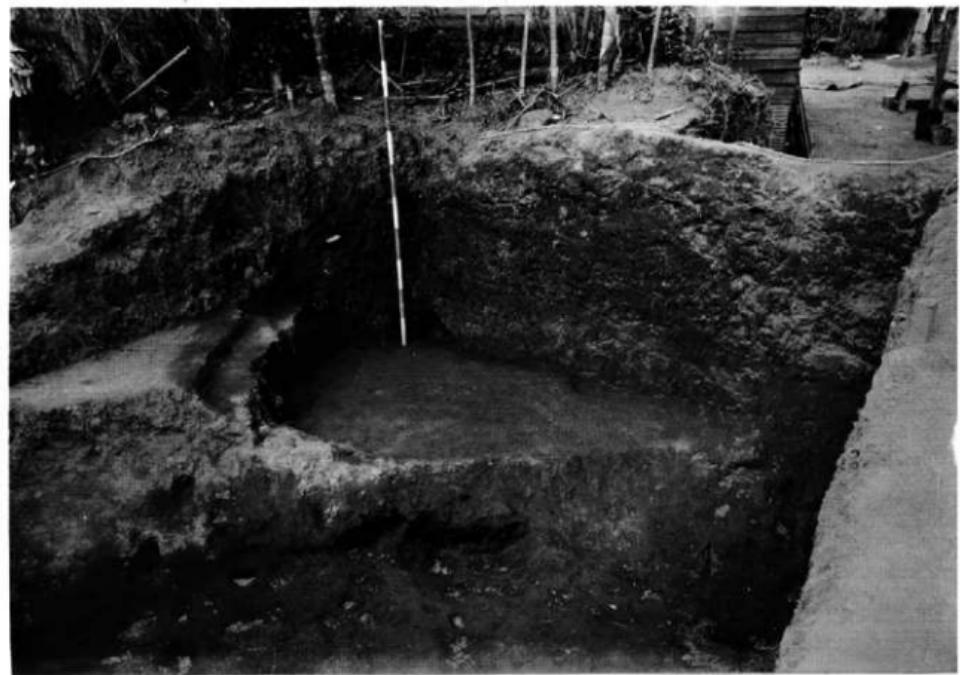
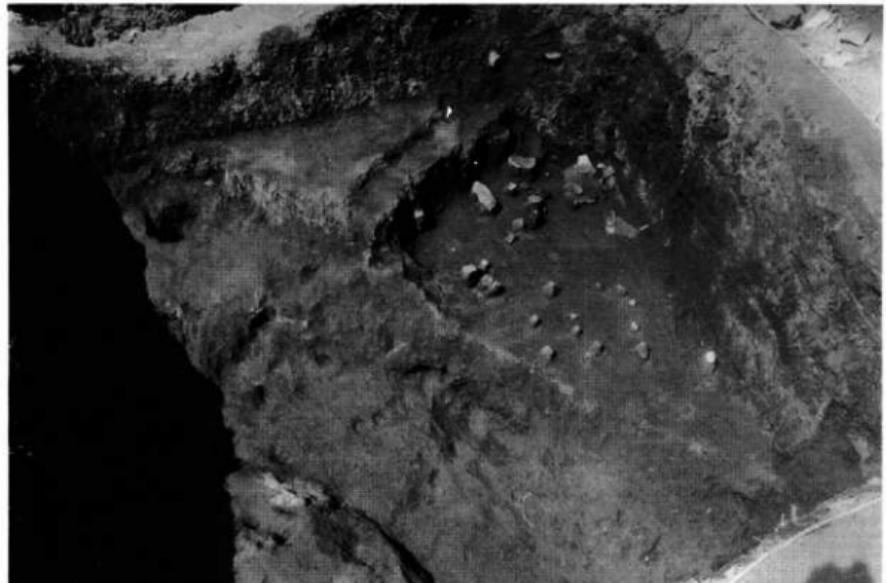


2 (b)

P₆

· 竖穴住居址出土状态





1(上) P₁₀ 袋状竖穴遺物出土状態、手前はD₁溝 2(下) 同発掘完了状態



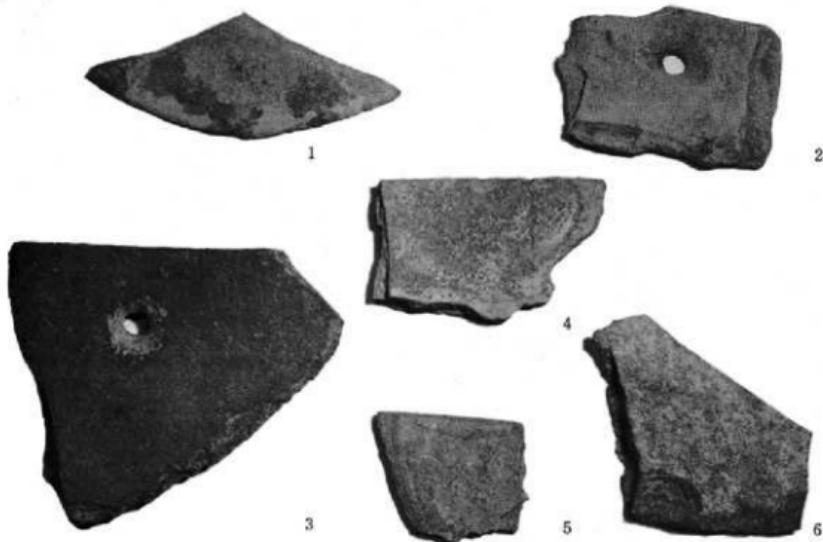
2(下) 同、発掘完了状態

1(左) SV区P₅・井戸址上部の発掘状態と出土土器

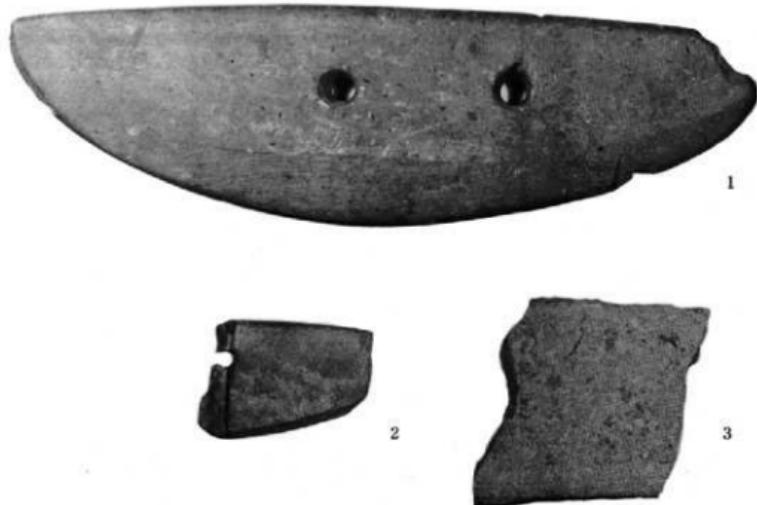


1 号 2 (下) S VI 区・左は方形堅穴 (P₁)、右は井戸口社 II (P₂)
D₂ 横形溝出土状態 (S V・S VI 区)

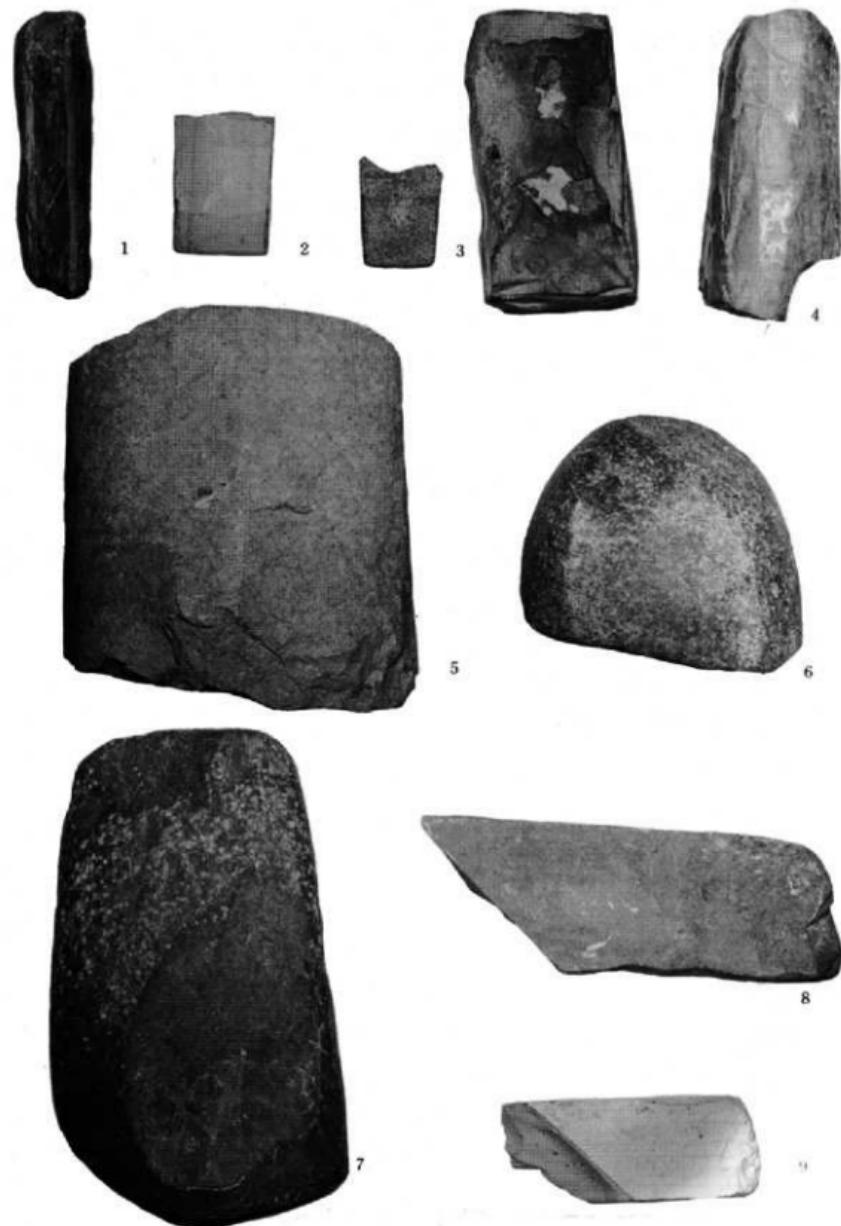




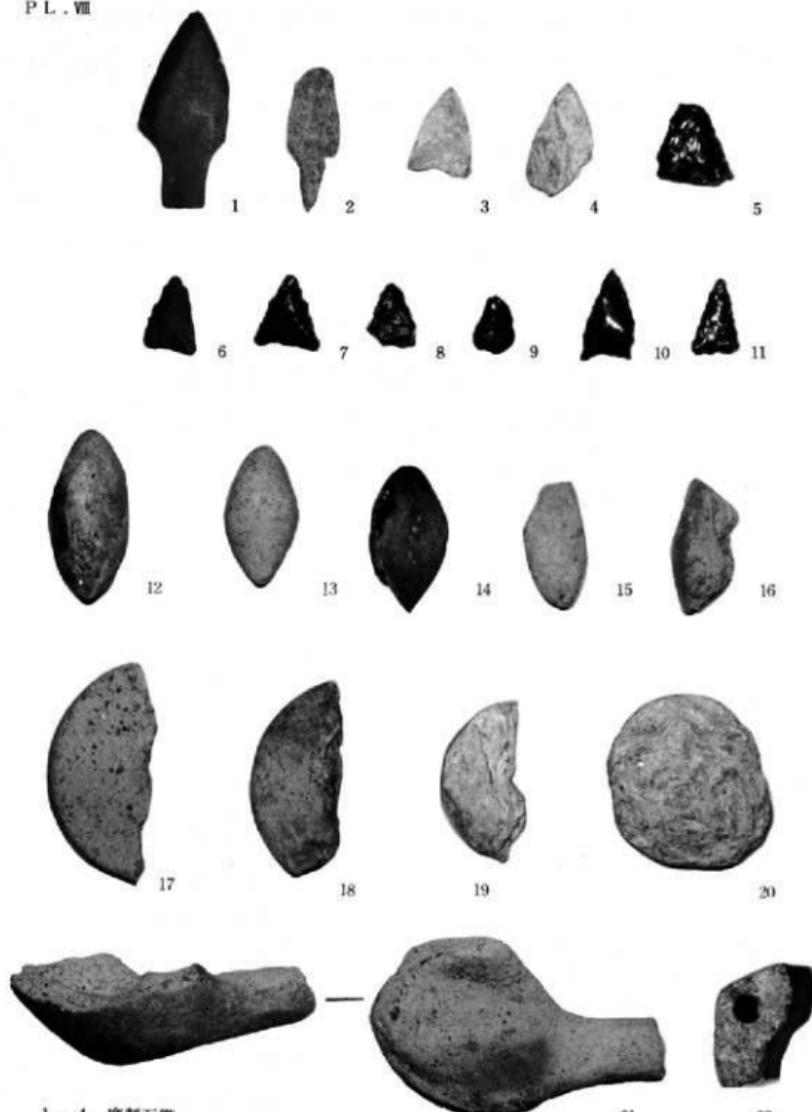
1 板付遺跡出土前期石磨丁 (3)



2 板付遺跡出土中期石磨丁 (2,3) と石鎌 (3) (1は実大、2・3は3分)



板付遺跡出土石斧と砥石 (1~4は3%, 5~9は3%)



1 ~ 4 磨製石鏃
5 ~ 11 打製石鏃
12 ~ 15 投彈形土製品
16 ~ 18 土製紡錘車
19 ~ 20 滑石 " 21 匙形土製品 (34)
 22 勾玉 (実大)

板付遺跡出土石鏃 (上)と土製・滑石製品 (中、下) (34)

福岡市板付遺跡調査報告書第8集

誤字訂正表

頁	行数	誤字	訂正
2	9	銅劍3本	銅劍4本
2	10	合計6本	合計7本
3	26	V~VII	V~VIII
5	7	S~V	S~V
6	20	夜白・板付I	夜白・板付I
6	第3図下	D ₅ ・WVI区……	取る。
6	写真説明	夜白・板付工層	夜白・板付I層
7	22	北辺で7m	北辺で7m
7	24	弥生式代	弥生時代
9	17	井土口	井戸口
10	見だし	井戸址II(P ₄ …)	井戸址II(P ₅ …)
10	12~13	観測	観察
10	17	#	#
12	1	1.7m下底部	1.7m、下底部
13	第9図	拓描	拓影
18	6	断面のみである。	片面のみである。
18	12	筑紫郡津古、石崎	三井郡津古、筑紫郡石崎
18	14	井戸址I(P)	井戸址I(P ₅)
18	23	刀こぼれ	刃こぼれ
18	45	装置使用	装着使用
20	21	佐賀県柏崎	佐賀県柏崎
28	第23図	27 Lemnaceae	27 Lemnaceae
29	3	科、属および種まで	科、属まで、および種まで

(見出しあり行数に含んでいない。)

調査関係者

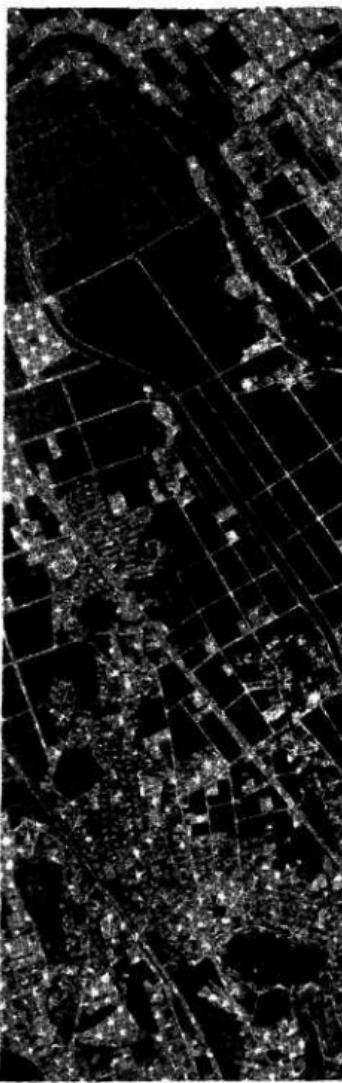
考古・人類学 鏡山猛 岡崎敏 永井昌文 泰貞次郎 小田富士雄（以上九大教官） 高倉洋彰 藤口健二 貞方敏 岩崎二郎（以上九大） 与小田寛（福岡教育大） 赤崎敏男（国学院大）
花 粉 学 西田京子
地 元 援 助 者 石田辰巳 高野貞哉 中牟田周造 中原志外顕 山浦盛雄
福岡県教育委員会 杉原信彦 岩下光弘 渡辺正氣 藤井功
福岡市教育委員会 阿部源藏 石井哲夫 豊島延治 大藏富第 青木崇 清水義彦 三島格
石橋博 野上淳次 田中道夫 山口俊二 柳田純孝 折尾学 塩屋勝利
下條信行

凡 例

1. 本報告書は国および県の補助を受けて福岡市が調査を行なった板付遺跡の調査報告である。
2. 調査および報告書作製にあたって、九州大学教官をはじめ地元、諸関係方面に多大の示唆、激励などの援助をうけた。また日本考古学協会が調査した環状溝の調査結果を本報告に併記収録することを心よく承諾された杉原莊介教授をはじめ日本考古学協会に深甚なる謝意を表する。
3. 本報告書作製にあたり、第V章を永井昌文氏、貞章を西田京子氏に執筆をいただき、貴重な結果をえ、また花粉分析の結果については、九州大学理学部細川隆英博士より懇切な指導と助言をいただいた。記して謝意を表する。
4. 今日まで福岡市の埋蔵文化財関係報告書は無番号のままで刊行されてきた。統一性と利用の便宜のために、今年度よりナンバーを附すことにしてし、従来の刊行物は、調査施行日の早いものから下記のとおりに、ナンバーを付する。

第1集	福岡市有田古代遺跡発掘調査概報	1967年
第2集	有田 遺跡	1968年
—福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告—		
第3集	福岡市生の松原元寇防皇発掘調査概報	1968年
第4集	福岡市今津元寇防皇発掘調査概報	1969年
第5集	福岡市老司古墳調査概報	1969年
第6集	福岡市埋蔵文化財遺跡地名表	1969年

(西部地域 第1集)



福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集

板付遺跡 発行／昭和45年3月 編集／福岡市教育委員会 印刷／青柳工業株式会社印刷部